特234
105

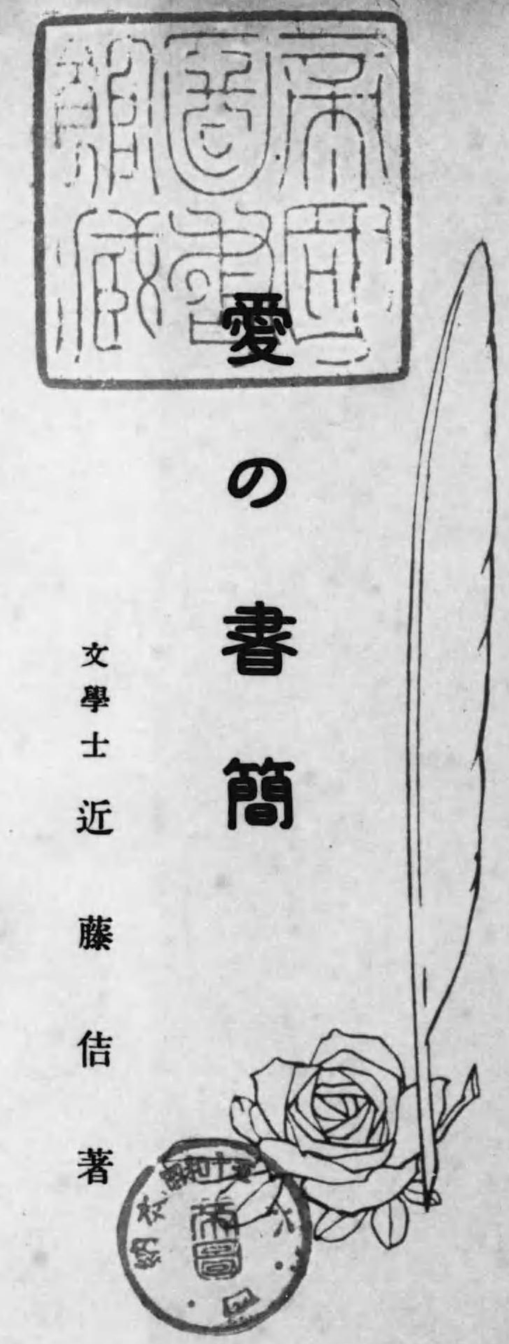
愛の書簡

始

特234-
105

愛の書簡

文學士 近藤佶 著



序

△自分は今回、この書『愛の書簡』を編むことになつた。最初、この書題をつけるに就ては、自分には多少の異議があつた。と言ふのは、自分はこの書が直ちに戀愛書簡集と誤解されはしまひかと恐れたからであつた。△たゞし、この書の中心となつて居るもの、又は書全體の印象よりして、この題は必ずしも惡い題では無いと思つたので、その儘、用ゐる事とした。

△自分が書肆の依頼を受けて、この書を編まうとした

目的は、「情愛を中心としたる書簡の作法、作例、文範」と言ふやうな意味である。自分の此情愛と言ふのは、極めて廣い範圍に渉つた者である。世間の人が、それ等の言葉を聞いてすぐ聯想する樣に、男女の間の事のみでは無い。親子兄弟、夫婦、朋友、それ等凡ての人と人との間に起る情愛を指した事である。自分はこの情愛を中心として、書かれた書簡に就ての雜感、及自分が想像し、假設した世界で諸種の人々が往復した書簡――即ち作例――……の中から、取つて文範とすべき書簡の集、それ等を編んでこの一冊を作つた。

△自分は書簡を大體に二つに別ける。一つは純實用のもの、一つは情愛を中心とせるもの、この二者の後の一方を中心としたのがこの書である。

△全體、書簡には作法などがあるべき筈が無い。故に自分はその上編に於ては、自分が從來、書簡に對して、種々と感じて來て居た事柄を、思ひ出す儘に書いて置いた。讀者はこれを讀まれて、如何なる事でもいい、默解される事があつたら幸である。

著　者

目次

手紙に關する雜觀

序言……二〇

諸君は如何なる時に手紙を書きますか……二〇

手紙は文字で書いた其の人々の言葉である……二二

手紙の性質……二三

ものも言ひやうで角が立つ……二五

さらに密接な連絡……二四

なぜ古い手紙の形式は不自由であるか……二六
自分の經驗……三〇
自由な新しい形式で書かれた手紙……三六
手紙ほど眞情の流露するものは無い……三七

手紙の效力……四〇

人の胸を占領する力。一人と一人との間……四〇
人の感情を責任を以て聞く……四二
手紙が言葉よりは更に自由である……四三
種々の友人から受取つて手紙についての印象……四四
背景になつて居るもの……六四
結局人格問題……六五

手紙の趣味……六七

手紙のバック……六七
青春の頃……七一
旅に出て……七二
心の寂しい時・心が強い打擊を受けた時……七四
手紙に特別な愛著心を持つて居る人……七四
美しい手紙……七五
花言葉……七六
花　束……八五
花束の作例……八七
花言葉の變化……九一

結末……九三

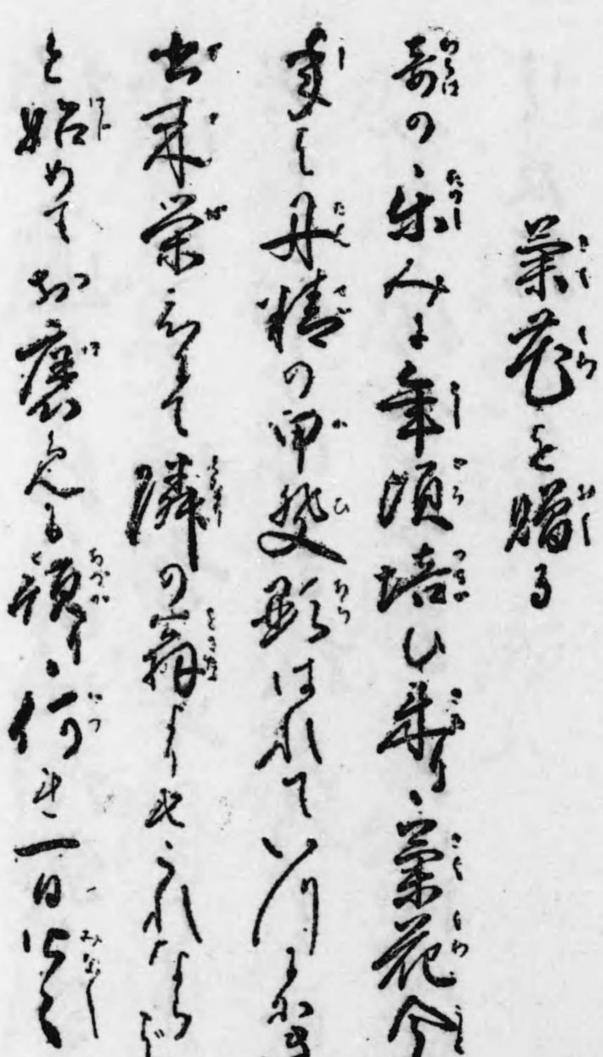
或る人々の往復した手紙……九七

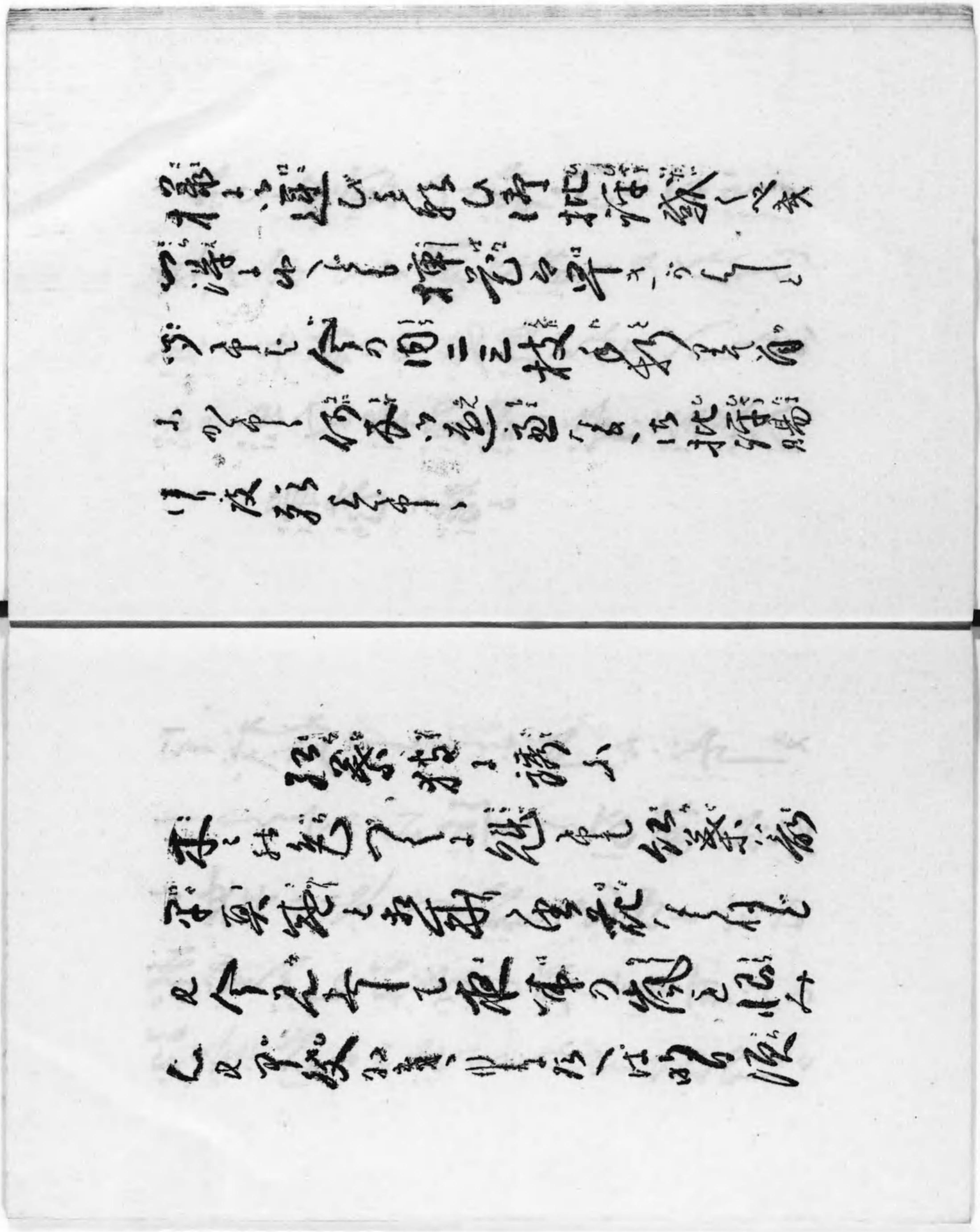
嫁いだ女から
△幼い時分から兄のやうに親しくした男へ……九八
別れて後
第一男より……一〇四
第二女より……一〇九
田舎の町より
△都會に居る舊友に……一一三
露ちやんに
△東京の幼き從妹に、効外の家庭より……一二〇
君の事を思ひ思ひ御不沙汰をしました
△別れた友人に、都の某より……一二二
旅よりのはがき
△東地旅行の途上より妹に宛てて……一二九
一 今水戸を過ぐ……一二九
二 窓の外はすつかり雪……一二九
三 第一の印象——仙臺の町で……一三〇
四 文庫をよく整理しておくれ……一三一
五 汽車の中は一人ぼつちだ……一三一
六 北上川の附近は……一三二
七 ここから遠野まで十二里餘……一三二
八 某といふ峠の上で……一三三

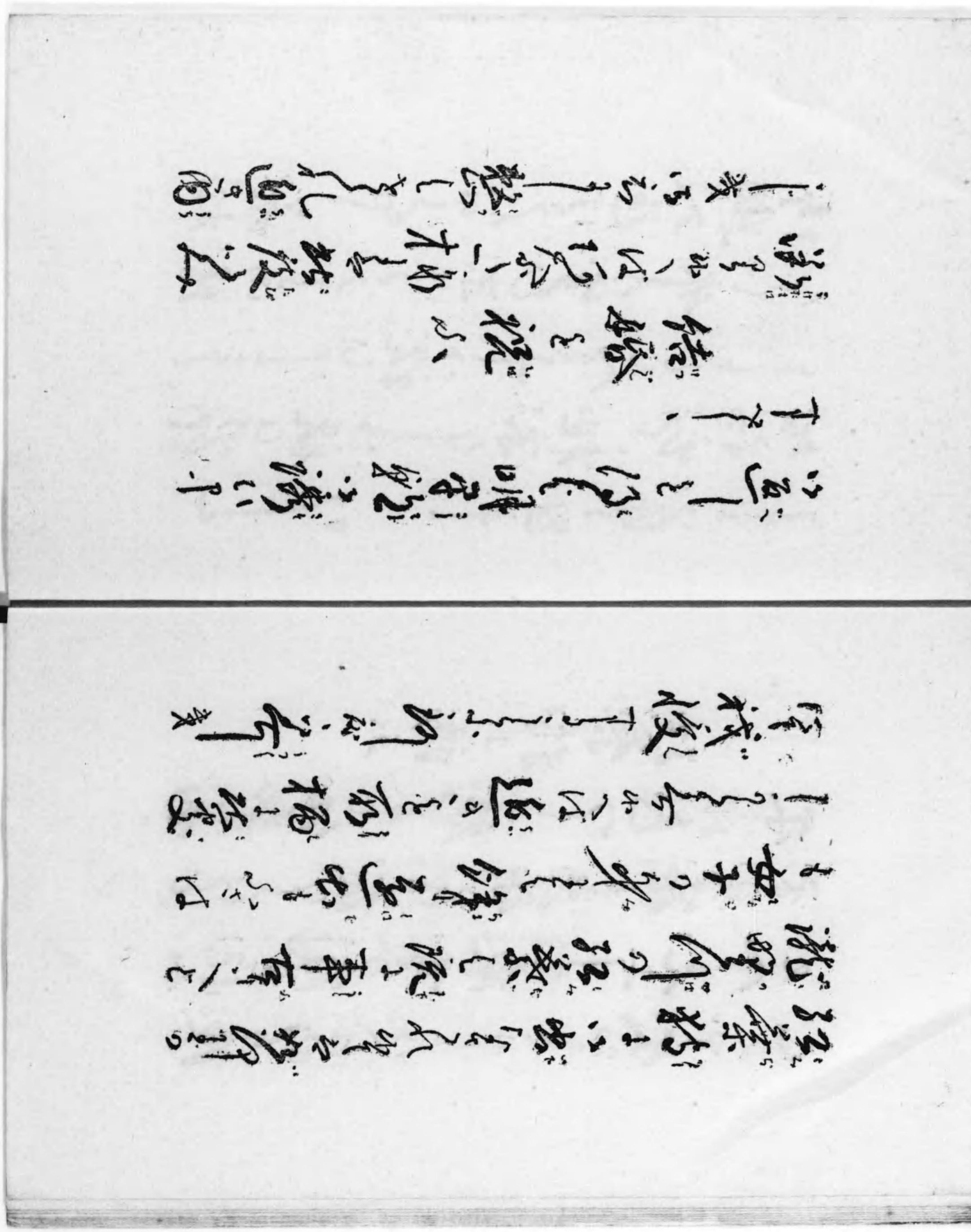
九 相乘りの人達と晝餐を始める處……一三三
はがき十二通
△種々の人よりのはがき……一三五
一 歩いて歩いて……一三五
二 獨立祭……一三五
三 私の顔を覺えて居ますか……一三六
四 いつぞやは電車で……一三六
五 舊友より……一三七
六 あの室は……一三八
七 祖母樣が六ヶ敷い……一三八
八 韓國の農地より……一三九
九 餘興芝居の繪はがき……一四〇
十 姉より下宿に居る弟へ……一四一
十一 弟よりの返事……一四一
十二 演習地から……一四〇

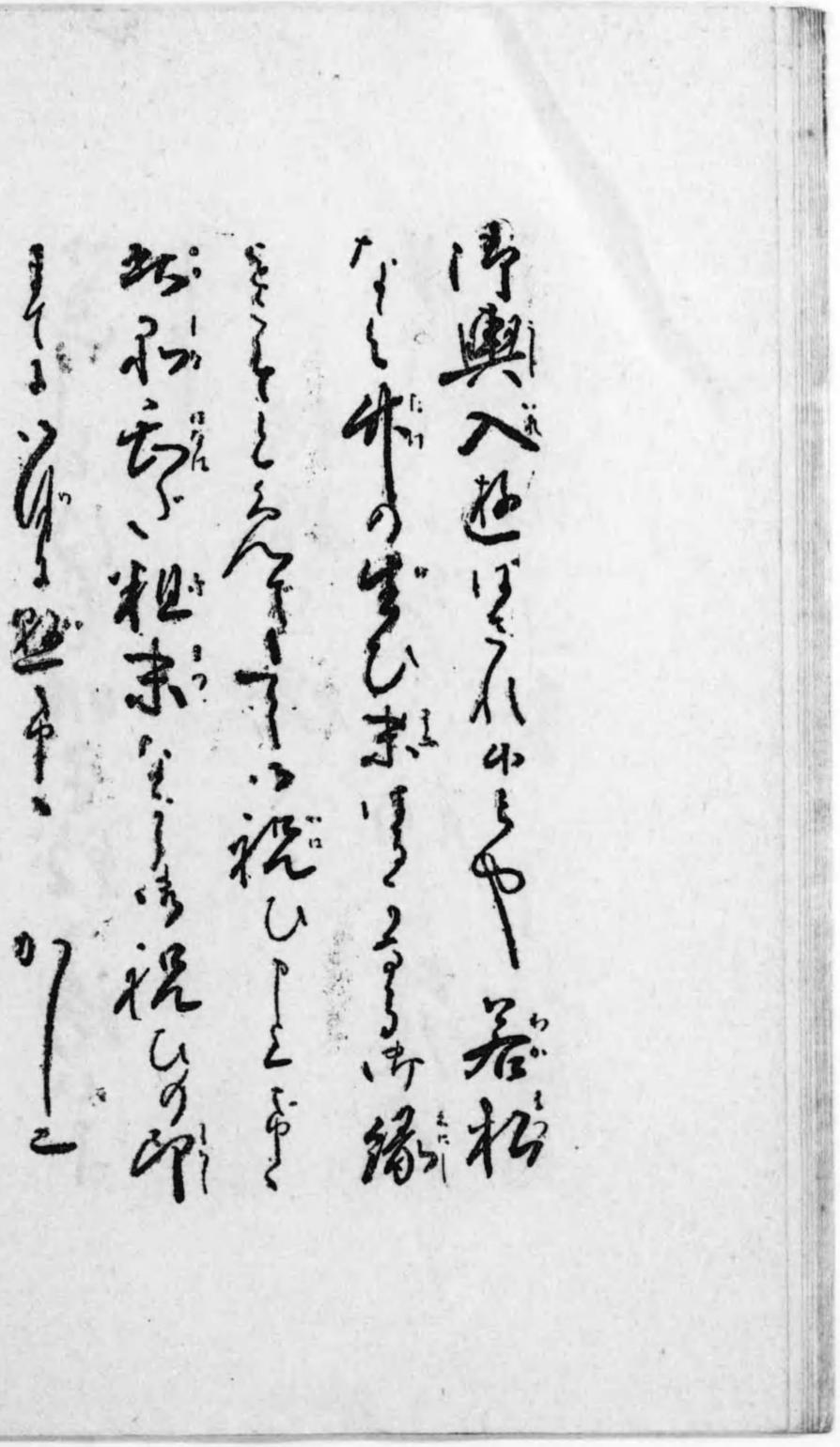
目次畢

習字用書簡









愛の書簡

文學士　近藤佶著

手紙に關する雜觀

第一　序　言

△諸君は如何なる時に手紙を書きますか――△手紙は文字で書いた其の人々の言葉である

諸君は如何なる時に手紙を書きますか

自分は、この書を讀まれる諸君に、先づ初めに當つて、標題のやうな問を發して見ます。諸君はこれについて、一應、自分々々に、如何な場合に手紙と言ふものを書いたかと言ふ事を考へて頂き度い。

去かし、それは誰れの胸にも、極めて簡單な同一な答へが浮ぶ事を自分は知つて居る。諸君は、斯う言はれるだらう、多くの場合は、簡單な要事、或は友情、肉身の人々に對する安否、自己の消息、自己の感情、その他、百般の事を自分の知人――父母、兄弟、朋友、愛人、先輩……に向つて、述べて來た、と……

その通りです！、之れより外に何がありませう？

諸君、自分が諸君に向つて、この樣な分り切つた事を言つたとしたら、諸君は必ず、人を子供か何ぞと思つて、馬鹿にしてると思はれるかも知れない。去かし、そんな事を思ふのは止して、もつと自分の言ふ事を聞いて下さらねばいけない。これがこの手紙を書くと言ふ事の、根本の問題である。

即ち、手紙を書くと言ふ事は、諸君が、日常顏を合せて交際をして居られる知己の人々と、その場、その場の必要に應じて、口から出る言葉を以て、應對をされるのと、幾何の差がありますか。人は自分の知人に對して、或る時は必要の要件を話し、或る時は情を表はして訴へ、或時は怒り、責め、罵り、喜び、愛し、願ひ……

その人が必要なる凡ての事をするものである。

この言葉を以て、人に傳へるのを、文字を以てしたらば如何です。それが手紙ではありませんか。

手紙は文字で書いた其の人々の言葉である

斯う言ふより外はありますまい。

自分はこの立場から、手紙を書くと言ふ事に對する意見を、簡單に述べて見度いと思ふのである。

第二　手紙の性質

△ものも言ひやうで角が立つ——△さらに密接な連絡——

△なぜ古い手紙の形式は不自由であるか——△自分の經驗

△自由な新しい形式で書かれた手紙——△手紙ほど眞情の流露するものは無い

ものも言ひやうで角が立つ

と言ふ諺言がある。が、自分は、一體、巧くものを言はう、有効にものを言はう、善い結果、善い反響のあるやうにものを言はうと思ふのは、人々が不知不測の間に持つて居る慾望だと信ずる。

文明になる程、人々の心が、微細に働き、表情が巧みになり、ものの言ひ方が上

手になる。田舎の人よりも、東京の人の方が人を動す言葉、表情を多く知つて居る。と言ふのは、如何して、自分の心を巧く人に傳へようか、如何して有効に人を動かさうか、と思ふ心が鋭いからである。又、その必要が澤山あるからである。

處で、今、述べたやうな事で人が心を勞する、と言ふ事は、この世の中に幸福に生きようとする上に、一つの有力な武器を持たうと言ふ慾望から起るものと思ふ。

手紙についても同樣である。人々はその手紙によつて、如何程か、自分の希望を全くしようと思ふ。それは言葉に出して言ふのと少しの變りも無いでは無いか。

も一つ、自分は手紙と言葉との間に、

さらに密接な連絡

を付けて置く必要がある。

これは今述べたやうに、この二つのものが、同じ慾望から出るものであると言ふよりも、この書を編む上に端的な一要素である。

手紙と言ふものは、決して如何書かねばならぬ、拜啓で始まつて、草々頓首、恐惶謹言で收まるものであると、必ずしも決つた譯のものでは無い。

人は人にものを言ふ時には、その相手に依つて、夫々、適當なものの言ひ方をするだらう。諸君は、諸君の嚴父、母堂に向つて、「君、斯うしてくれたまへ」「お前斯うしておくれ」と言ふやうな事を云はれるか。斯う言ふ事の不自然であるのは無論の事で、自分がこゝに態々斯う書いたのを讀んで、諸君は必ず、一笑に附せられる事であらう。人はものを言ふのに　相手に依つて、その樣式を撰ぶと言ふ事は殆んど自明の事だ。

又、人はその時の事情に依つて、樣々のものの言ひ方をする。例へば、怒つた時に單純に嬉しさうな顏や、聲をして相手にものを言ひ掛けるか。喜びに充ちて居る場合に、人を怒鳴り付けるか。そんな事は解り切つた話であらう。

さて、ここで自分は一つ言はねばならぬ。從來、手紙と言ふと、必ず一定の形式があつた。自分が前に言つた通りに、拜啓で始まつて、草々頓首で終るものになつて居た。それは成程、ちやんと儀式の備つた、整つた間違ひの無いものだ。併し、同時に吾々が自分の心持を人に傳へんとするに、非常に不自由なものでは無いか。

なぜ古い手紙の形式は不自由であるか

前に、古い手紙の形式は吾々にとつて、極めて不自由であると言つた。何故、不自由であるか？

その前に當つて、自分は自分が從來手紙を書いた時に當つて、折にふれて感じて來た諸種の記憶を書かう。これは、たゞ論理を以て是非するより、より以上、古い形式の手紙に對しての明瞭な批評である。

自分も、少年の初めに當つては、やはり、

拜啓仕候、時下極寒の候に御座候處、御全家皆々様益々御健勝の段大賀奉り候。降て弊屋一同無事消光罷在候間乍憚御安心下され度く候云々

と言ふ、判に押したやうな手紙を書くやうに敎へられた。で、その時分、自分が、伯父、叔母、敎師、友人などに向つて、暑中休暇や、新年の折などに手紙を書く時に如何な事を手柄にして書いたかと言ふのに、たゞ、御健勝と書くのを、御勇壯と書いて見たり、御安心と言ふ處を御休意を書いて見たり、僅に、夫々の定つた文句の字の珍らしいのを撰んで、その人々に自分の貧弱な知識を誇らうとした位に過ぎなかつた。決して、自分が別れて暮して居る間に心に起つた愛情や、自分の目に映つた面白い出來事を傳へようと努めはしなかつた。

それから、次第に時が經つて、中學に入つた。自分が覺えて居るのは、中學の三年目位までは、友人との間に、今に面白い書簡の往復をしたと言ふ記憶が無い。それは自分の生活にそのやうな深い味のある事が無かつたのであらう。が、一方には

たしかに、手紙と言ふものは、たゞ一つの儀式、でなければ形式的に型に入つたものとしてより外に、自由に自分の思ふ處を書いて、喜び、悲しむと云ふ事を知らなかつたからであらう。

さて、自分は十六七になつた。その頃に、自分は初て二三の友人が出來、その人々と手紙の往復をした。そして手紙と云ふものの興味、手紙に對する種々の興味と言ふものを覺える事が出來た。その時分の手紙と云ふものは、もう、少くとも前のやうな、型に入つたものでは無かつた。けれど、その文章と云ひ、その言はうと思つた事、好んで書いた事などは、今から思へば種々と不自然な、僞の多いものであつたが、去かし、その少年の頃の心に起つた事を自由に、十分に自分の友人達に云はうと企てた事は事實であつた。それから此方、長い間、自分はこの根本になる道の上に立つて、種々の經驗をした。

これだけでは、舊形式の手紙に對して自分が感じた不自由、不自然を說くのは不足であつた。で、自分は、自分の經驗について書く前に、も一言それに向つて付けたして置く事とする。

舊い手紙の形式は、昔、德川時代の人々が感じた必要、社會的の儀式、禮式、などを標準として、誰れの場合にでも普通に用ゐられるものを作つてあつた。吾々は友人の安否を問ふと云ふ場合にも、何時でも決りきつた言葉で云つてのけてしまふ。その上に、その人と逢つた時に、特別な言葉で問ふ、と云ふやうな處が無い。

勿論、古い手紙を讀んで見ても、その書いた人々が特に强く心を動かして居る場合など、その他、昔でも知識のあつた階級の人達が心を傾けて書いたものには、決してそのやうな型に入つたものは無かつた。思ふに手紙程、自由に、十分に自分の思ひを述べようとするものは無いだらう。それを、自分が少年の時の敎師達——以前の人達は、手紙と言ふものは斯う言ふ形式に依つて書くものだと言つて敎へたのである。當然の事、不自由を感ぜざるを得ないではないか。それは久しく逢はなか

つた友人と面を合せた場合に、兩方で心が蕩け合つて話す事が出來ずに、羽織、袴を著て儀式のやうな言葉を交はしたとする、丁度、それと同樣の物足りなさを感ずるのである。

が、そのやうな事はさて置いて、これから自分は

自分の經驗

を、――少しく實際に當つて感じた經驗を書いて見よう。

で、自分は親しい同年輩の友人との間には、可成、その時その時に十分であると思はれる手紙を書き合ふ事が出來るやうになつた。その時に應じては、喜びもし、怒りもし、次第に自由になつて來たが、自分が先づ第一にぶつつかつたのは、中學の時分に、同鄕から出て居る先輩に書く手紙だつた。その年長の友人に向つては、自分は知識の上から、又は精神的の上から、可成尊敬をして居た。その人に向つて書く手紙が、如何も同年輩の友人に送る手紙のやうに行かなかつた。ぎごちない、やはり拜啓陳者式になり勝であつた。少しく自分の思ふ處を述べようと思つても、手紙の文句の中に入れる敬語が煩しくつて、中々思ふやうに文章が伸びて書けなかつた。

それと同樣の感を起したのは、次には自分が父に手紙を書く場合に多かつた。これは日本の習慣――或は封建時代、階級のやかましかつた時代、人間を平等だと感じなかつた時代の感情の傳習に煩はされるのであらうが、如何も親に向つて自分の腹一杯の事を書く事が出來なかつた。父に向つて書く手紙は如何しても決つた敬語で作り上げた、型通りのものになつてしまふ。それで自分はこれ等の人達に多く手紙を書かなかつた。又、その頃の生活には、別段重大な事や、心が攪亂されたやうな事は殆んど無かつたと言つてもよい。それで、それ等の人に手紙を書かずともすんだのである。

話が少しく横路に入るやうだが、その前後に、大阪に居る文壇の大家で、自分が非常な熱心を以て敬愛して居た某氏と言ふ人があつた、その時分、大阪からその人等を中心としてある小さい文學雜誌が出て居た。自分はその雜誌の讀者にもなり、同時にその敬愛して居る先輩に向つて手紙を書いた。如何樣な手紙を書いたかは、今はすつかり忘れて居るが、その手紙を書かうとして感じた心持の記憶は、たしかに今でも胸の一部に殘つて居る。

自分は殆んど言葉に窮した。その人に向つては尊敬の情が、戀の心持を交へて居た。その一種の憧憬の情を表はす爲めに、自分は實に苦しんだ。而かも、反面には自分の文句が、未見の人に媚びるやうな事になりはせぬか、と思はれる恐れもあつた。その不快な、みえ坊な心も手傳つて居るので、非常に苦んで書いたが、恐らく苦んで極めて下手なものを書いた事であらうと思ふ。

それ迄は、或は不熟極まる中古文式の美文などを書いて得々とした事もあつた。要するに、まだ手紙を書くと云ふ上に十分の經驗を持つて居なかつたのであつた。

その後、自分は小年から青年に移らうとする頃に、同年輩の文學好の友達が澤山出來た。その人達と往復した手紙と云ふものは今でも澤山あるが、極く上品な優しい事を云ひ合つた——或は無理にも云はうとしたものであつた。或時などは乙女のやうな言葉で書いた手紙を貰つて、書いた人に逢つて見ると鬼のやうな人であるのに驚いた事もあつた。併かし、これ等の一團の人は趣味を戀ひ慕ふ人であつて、互にまだ親友ではなかつた。

その後、吾々の周圍には言文一致體——口語體と云ふ文體の勢力が次第に擴がつて來た。これはたしか僅に七八年前の事である。現在の場合から見ると、その文體が有効であつて、進歩したものである事は、極めて明白な事であるが、當時の人々は、從來用ゐ來たつた文章語體の文體を捨てるのに、樣々の未練を感じた。新しいものに移らうとする間に際しては、古い習慣の中に習はれたものには、必ず過去に

對して無意味な未練を感ずるものだ。それが、まだ極めて若かつた自分などの胸にもあつた。

成程、口語體で書けば文章に心持も乘る。從來たゞざつと書いて置いたものも、細かに十分に人に傳へる上にも、自由で便利である。去かし、それは初にも經驗をした、自分と同輩の友人か、兄弟などに向つての事であつて、つまり、口でものを言ふ時にも遠慮なしにものが言へると云ふ相手だけの場合であつた。

長上に對しては、やはり古い形式の儘で、儀式ばつたものの言ひ方をするより外は無かつたのである。この長上に對して口語體で以て手紙を書くと言ふ事については、現在でも吾々は多少不便を感じる事がある。去かし、それはまだ古くからある習慣と全く縁が切れない上の卑怯な心持からであつて、口語體で以ても十分に嚴肅な文章が書けるものである。その證據には、一時は、軟派の文學（とよく、口に言つた）――例へば小説とか、美文とか言ふものに對しては口語體が十分に使へるが、硬い議論文などの方には、まだ十分使つて行ける程の文體では無いと云つて居たものである。そのやうな謬見は今日では跡方もなく取り去られてしまつた。手紙でもそれと同樣である。

文章を如何書かうとか何とか言ふ事に對する心持は別として、古い形式の手紙の書き方に向つては自分は以上のやうな風で、今日に移つて來た。

而して今日に於ては、自分は手紙を書く上に於て唯一の信條として、自分がその人に對してものを云ふ通りを、それを文字に移すと言ふ事を守つて居る。

この事を今少し、具體的に言ふと、父に向つて書く手紙は父に對つての言葉そつくりの調子で、その時の要事でも心持でもを順序を立てゝ書くし、先輩に書く時には、その人に逢ひに行つた積りで書く。手紙の調子、語勢、書き出し、終結、皆その時に應じて書くと言ふ事にして居る。自分はそれより外に良好なる手紙の書き方は無いと信じて居る。

さて、次には自分が近頃見る、若い人々の

自由な新しい形式で書かれた手紙

について、少しく述べて見よう。

自分が近頃、弟から、妹から、從妹弟から、或は男女の種々の友人から受取る手紙を見ると、實に若草が野に萠えやうとする時のやうな清新な感に打たれる。それは種々にその人々の感情を表はして居る。或は罪なく、家は氣取つて詩人らしく、或は嬉しさうにあどけない事を言つたり、或は人の心を計つて媚びようとしたり、自分の心を包み僞つて、自分を人の前に僞つた形に見せようとしたり……それは樣々の手紙がある。

だが、どれを見ても、前に自分の信條として居ると書いたやうに、極めて自由に、その人々が、自分自分に心を述べる、その場その場に適當な形式を以て書いて居る。殊に新しい教育を受けた女の人々は、其手紙を書く事が極めて巧みだ。その場、その場で、その女の人の胸の躍つたそれが、微細に、その儘に話して聞かされるやうだ。それに依つて受けたものの心は、十分に動かされる。

これについては、尙ほ次の章で書くとして、ここには、手紙の性質と言ふ範圍の中で、も一つ思ひ付いた事を書かう。

手紙ほど眞情の流露するものは無い

と、昔から大抵の人は信じて居る。併し、自分はそれに向つては、逆に、手紙程、僞を自由に吐けるものは無い、と言ひ度い。

これは決して詭辯を弄するのでは無い。眞實さうである、全く手紙では、自由に僞がつける。吾々は人の面前で、隨分人を欺すものだ。故意に人を欺さないとしても、人と言ふものは他人の前では自分の性質を種々に包まうとするものである。

それと同じ道理で手紙でも人は中々偽をつく。否、手紙の方が樂に偽が書けるものである。手紙程、眞情の流露するものは無いと言ふのは、正直な、眞情を吐露した手紙をばかり見ての言ひ草にすぎない。

何故今、自分は殊更に、このやうな事を言ふか。と言ふのに、人は手紙を書いて自分を守り、樂しみ、愛情を交換する。それと同時に他人を傷け、破り、攻め、欺く。これも又人間が世の中に生きて行く上の武器の一つである。

讀者諸君、自分の言ひ草は、或は少しく妙に聞えるかも知れぬ。自分は人がする惡事に同情を持つて居るやうな事を言つて居る。けれど、それについては自分はこでは道德の問題を議して居るのではない。たゞ「手紙」と言ふものを中心として書いて居るのである。善を好み惡を惡むと言ふ事は立派な事だが、それは今、自分の說く可き題目では無いのである。

で、吾々は手紙を書く時に、或る時に於ては心を傾け、情を盡して、自分のこの思を訴へるが、又或る場合には、自分の本心にすつかり蓋をして、たゞ自分の利益を守るため、安全を計る爲めに對當者を偽る。

その他に手紙と言ふものは、夫々書いた人の性質に依つて、變つて來るもので、世間に種類が澤山あるやうに、如何しても自分の心がよく分つて居ないで、たゞ自分自分で誤り解して居る人などの手紙には、その人の心の基礎の上に立つて種々にものを言はれて居るものだ。又其人の心に一つの石のやうな虛榮があつて、如何な場合にもそれが影を消さぬやうな人の場合には、その手紙には眞情が出て居るものでは無い。

即ち、手紙と言ふものは、到底其書く人の心の上に築き上げられたものである。而して決して單純な、清潔なものだけでは無い。

第三　手紙の效力

△人の胸を占領する力。一人と一人との間――△人の感情を責任を以て聞く――△手紙が言葉よりは更に自由である――△種々の友人から受取つた手紙についての印象――△背景になつてゐるもの――△結局人格問題

人の胸を占領する力。一人と一人との間

さて、第三には手紙の持つて居る力、效力について思ひついた事を書いて見る。

先づ第一に感じるのは、手紙と云ふものは、一人の手から或る一人の人の手に渡されるものである。或る一人の人が、自分の心を訴へんとする一人の人に向つて、その心を表はすものである。

人と云ふものは、誰れと言ふ事なしに言れた言葉と言ふものは、可成、力の入つた立派な事でも、すぐ、ずつと其胸に泌みては來ぬものである。その間には冷い判斷が多く入りやすい。しかし、特別に自分だけに言はれた事と思ふ時には、その心は平常よりも餘程平になり、靜かになり、軟かになる。そして其の人の言葉や心を感受しようとするものである。

手紙はこゝに一つの有効なる力を藏して居る。例へば自分が一友人に向つて、自分の苦悶を訴へた手紙を書いたとする。その人はその手紙を受取ると、自分の言葉を一人で身に泌みて味はふ。少くとも數時間の中にその手紙を受けた人の胸は、自分の感情を訴へる聲で占領されて居ると見てもよからう。

又自分が人の同情の手紙を受取つた時にも、同樣である。たしかボナパルトであつたと覺えて居る。軍事、國事の多忙、煩雜な時には如何なる音信も決して開封しない。『何に時期が過ぎれば事も過ぎるものだ』と言つて居たと言ふ事である。これ

を反面より見れば、手紙が如何にも人を動かし易いと言ふ事を證して余りあるものでは無いか。

人の感情を責任を以て聞く

次に自分が、受取つた手紙を讀んで居ると、自然、その手紙の中に書いてある感情に對して、こちらで責任を以て考へ、責任を以て聞かねばならないと言ふ心持がする。これが又、手紙の有力な要素の一である。

吾々は、面と向つて自分一人に特に心を開いて、人から樣々の事を依頼される、或は訴へられる、それを聞いた時には、吾々はそれに向つて必ず責任を以て聞き、責任を以て考へるものだ。人が心を開いて書いた手紙に對する時には、吾々は同樣の感がある。即ち、直ちに人の胸に入るものだ。

と同時に、一方には吾々は手紙によつて人を毒する。前に述べた樣に、手紙と言ふものが、人に力強く印象を與へるものであるから、同時に、又惡い印象も同樣に強烈なものである。されば

手紙が言葉よりは更に自由である

と言ふ、點もある。

人は弱い。人と人と對して居る時に當つて、弱い人はその相手の力に壓せられるものだ。從つて其人の前では、十分に自分の意見を述べる事が出來ない。其樣な人にとつては、却つて言葉よりは手紙の方が十分に意を盡す事が出來るものである。

が、これと逆に、この文字を以て書いたものが、人の胸に殘す印象について、吾々はその場その場で、その勢を加減すると言ふ事が出來にくい。即ち、一度放つた矢は、矢そのものの力で飛ぶだけは飛ぶ。それを如何も節調する事がむづかしい。その爲めに輕く人の心に觸れに行く可き處が鋭くなつて、強い反感を買ふやうな事

が屢々ある。そこは言葉では、時に應じ、相手の心持に應じて、自分の言ふ事の節調をする事が出來るものである。

殊に、少しく感情上の問題などで、誇張され易い事などの場合には、手紙の文面の僅かの行きちがひが、隨分意想外に重大な事を引き起す事がある。自分なども、そのやうな事について、種々の經驗を持つて居る。これ等は宜しく注意して行く可き事であらう。

次には

種々の友人から受取つた手紙についての印象

について二三の實例を上げて書いて見よう。

その一

「吹雪の中を、一里余の路を六時間計りかゝつて來た。私は今町の郵便局に立つてゐます。吹雪で五六度倒れました。お出でなさりませんか。

みな樣はお變りは御座いませんか。御都合次第お出なさい。今の中ですよ。丁度今村に田植踊りと言ふのがあります。」……みちのくの遠野町にて、佐々木生。

としてあるはがきがあります。これは昨年……の二月の十日の日に受取つたのである。このはがきは鉛筆で走り書きをしてある。この時には自分は、東北の佐々木と言ふ人の郷里の方に旅行を思ひ立つて居た。丁度、年末でこの人も歸るから、自分がまだ見た事の無い、北方の雪國の有樣を見せてくれると言ふ約束で、この人は先に歸つて居た。處で、自分は出發たい〳〵と思ひながら、あとから〳〵用事がおつかけて來て、如何する事も出來ないと言ふ始末で、日を空しくして居た。その時にこのはがきが來たのである。

自分はこれを讀むと、氣が苛立つて來るやうに感じた。先方でも自分の來ぬので

苛立つて待つて居る、その心持がすぐ感じられた。兼ねて聞いて居た、村から遠野と言ふ町に出る一里半位の道を、恐ろしい吹雪に吹かれて、幾度か倒れながら、自分の來るのを待ちきれないで出て來てくれた、と言ふ事もすぐ感じられた。

丁度、雪國を知らない自分が、雪を見に行くには、いゝ時期でもある。殊に其の地方特有の田植踊（舊正月にある、一種の舞踏式の踊）と言ふのもある。折角來るのなら今だのにと思つて、急き立つて居る心持。あんまり來ないので失望して、少し怒つてる心持。こんなに苦しがつて町まで出て來たのに何の音信も無いと言ふので不快を感じて居る心持。そんな事を一つにまとめて、自分は、その友人の面影を思ひ浮べた。この文章の急促した處も、自然とその人の心持を自分に傳へた。この時には自分は慌てその人を慰めるやうな返事を書いた事を覺えて居る。

その二

是は、土佐の方に牧師になつて行つた友人からのはがき。細いペンで書いてある。

「その後は御無沙汰。まいど雑誌を有難うございます。

こないだ一週間、高知へまいりました。金曜日にひと先づ歸つて來て、土曜會や、日曜の朝夕の説教や、水曜會やと追はれ〳〵てゐたが、今日また（木曜日）高知へ傳道にまゐります。

こないだ高知で日曜日に、朝夕二回説教をしました。聽衆二百五十人位。朝は場所馴れないので、聲を初めッから調子はづれに出して、終りまで氣のらず、失敗。終日氣持が惡かつたが、夜はまづ大方出來たので、歸途の電車でほつと安心致しました。此度は歸るとすぐ詳しい手紙を差上げたうございます。

△△さん如何ですか。△△ちやん、△△ちやんいかゞ。逢ひたうございます。

今、二十八日朝五時半、これから陸行して行く處です。まだ眞暗です。提燈をつけて、一寸書きました。此處から高知まで十里あります。車や、馬車や、

船にゆられ〳〵行くのです。」

と言ふはがき。　××　年の一月二十八日に出したもので、この人が教職に入つてからまだまる二月とならぬ時の手紙。

この友人は僕の交友の中でも、一番眞面目な、それで居て、徹底した處のある人だ。平生のものの言ひ方と、この手紙の文句とがチャント一致して居るので、讀むと此方の心持に、その人からものを言はれたやうな氣がした。それに自分は全く未知の地方の事だが、その人が忙しさうに、職務の爲に身を勞して居る樣子も感じられた。提燈をつけて、早朝出立すると言ふ時に、遙かに別れて來た自分を思ひ出して、その最近の消息を書いてくれたと言ふのも嬉しく感じられた。

自分はこのはがきを見た時に、不思議にその友が講壇に立つて、說敎して居る姿が目に浮んだ、そして、遠くからその友の說敎がその地方の人を動かすやうにと祈るやうな心にもなつた。

その三

これもはがきだ。短かいのを多く撰み出したので、葉書に書かれたものを多く寫す事になつた次第である。さて、このはがきは自分と同じく藝術の境に身を置いて居る友人が二人で越後の方に旅をした。その途中から、寄せ書きにして送つてくれた繪はがき。雪で埋れて居る高田の町の景色のるはがきの裏に

「寂しくつて泣き出しさうな顏をして、昨夜ここへ來ました。心から待つてくれる人もない故郷は知らぬ旅よりも淋しい。こゝは僕が中學の五年を送つた若い夢の跡だ。而てこの旅の心！。今は追懷すらも苦しい」……越後高田にて御風

「山の景色が仲々面白く候、併し酒のしらべはまだついてゐません」生方生

と書いた下に、人の顏が小さく印のやうに書いてある。

このはがきの着いた時には、或る新聞紙でこの二人の友人が、越後路の方に旅に

出たと言ふ事を聞いて居た。自分はこの友人達とは、平生さう親密に往復はして居らぬ。が、そのはがきの書を見ながら、二人の人の互に書いてゐる言葉を讀むと、二人連れで旅をして居るこの友人達の心持や、その一つの土地に着いた時の二人の心持の相違などが思ひやられた。一人の人は、そこに古い記憶がある。そこで育てられた間のいろ〳〵の記憶があるので、何でも無くたゞ旅をして來た人の心持とは全く違つて居る。が、一人の方は一切、他國に來たと言ふ調子で、さう強く心を動かしては居らぬ。この二人の心持の違ひが何でも無い言葉の中に傳へられて居る。自分はそれを感じた。

殊にゑはがきであつたので、それに對して、想像を募らせる事もあつた。

その四

「今日は、御訪ね下され候處、墓參の爲△△へまゐり居り、失禮致し候、御文集御刊行被成候由、新聞にて存居候處、御携御惠贈被下、御志の程感銘仕候。「×××」其他の雜誌にお出し被成候折はよくも拜見不致候ひしかば、是非こまかに拜讀仕度存居候、小生等が如き職業にては、ともすれば無意味に日を送り勝にて、自分のみは年をとらぬ氣でも、追々新しき御感じと併行致兼候やうに相成、昔は話にならぬと評せし世の常の叔父樣の如く、やがては、自分も相成申可虞多く候故、此度の御賜は御想像以外にうれしく存候事に候、赤城へお出被成候事は、前方より仄聞致居候、御文以外の御見聞もこま〳〵承度候。近きに御訪ね可申上候へども、此方へもよき御序候はゞ、御立寄たまはりたく候、草々頓首、七月八日夕」

これは自分が大正十二三年の夏に初めて文集を公にした時に、兼ねて、尊敬して居た先輩某氏から送られた手簡であつた。この手紙を讀んで自分は一種言はれぬ温い心持を味ひ得た。自分の志が受け入れられた嬉しさを感じた。その某氏の總明

な、寸分の隙の無い、そしてあくまで柔かく温いのを感じた。自分はこの時の單純な喜びが今に忘れられない。

その五

「兩君のお訪ねを受けた時は、山より歸つた時にて丁度大雨盆を覆すやうでした。

で、礦山を見るも内外を見る必要があるのですから、遂々宿に泊める事と定つた、雨少しやみてから、撰礦所と冶金の場所とに案内して宿にかへりました。明日は坑内をお伴するつもりです。たゞ充分に御滿足を與ふることの出來ぬことが殘念であります。しかし、委しく見んと思へば、日數がかゝりますから致方がありませぬ。

君のこの頃の消息も少しは聞きました。けれど君のお手紙は鶴首して待つてゐます。君はアダナを附けることが上手であると聞いた。それは僕にはおかしかつた。驚きはしなかつた。何故と言ふと、君は昔から、その事には上手だつたものね。失敬々々

中々君等の生活は面白いさうですね。實に羨しい。僕は毎日まるで勞働者のやうな眞似をして居るのです。このつまらない處御推察を願ひます云々」

この手紙を貰つた時には、自分は上州の赤城山に旅行して居た。この友人とは九州で中學時分のクラスメートで、丁度五年ぶりで東京の自分の家を訪問してくれた。その時には自分は赤城行きを計畫して居た時で、この友人は足尾の銅山にエキスカーションに（この人は京都大學の工科の生徒だ。）行かうとして出て來た途中であつた。で、二三日一緒に東京見物の案内をし、それをすませると、兩方とも上野から滊車に乘つた。それから自分は赤城山に行つたが、そこで二三人の學生と知り合ひになつた。その中の二人が山越えをして足尾の方に行く事になつたので、自分はこ

の新知の友人達の爲めに紹介狀を書いた。

その人達が足尾に行つて、自分の舊友に逢つて來た、その時にことづかつて來た手紙がこれである。

自分はこの手紙を讀んだ時には、五年も前に一緒に中學に居た時分の事がはッきりと胸に浮んだ。「君は昔からアダナをつける事が得意だつた」などと書いてある邊も、特別に嬉しく感じられた。殊に、自分も旅をして居て、その友人と離れては居るものの、同じ地方で、何となく一人はあつちの山の上に、一人は此方の山の上にと言つたやうに、呼べば答へるやうな處に居るやうな心持がしてなつかしかつた。まあ、譬へて言へば、遠い處に居る、懷しい友人と電話口に立つて話し合つて居るやうな心持がした。

その六

「留守中、おいて下され候よし、相にく成田の方へまゐり居り候爲、失禮致し候。明日か明後日かへります。もうお伺ひは出來ないと思ひます。皆さんで京都見物にでもいらつしやい。その節はおまち申します。その内また東京へ來ます。皆樣御きげんよく。△△さまへよろしく。今これから親戚の方へゆきます。本郷にて」

この手紙は、東京から地方に行つてゐる一年たつた人が一寸東京に歸つて來た、その時に、自分と行き違ひになつて逢へなかつた、その、もう又地方に歸ると言ふ時のはがきである。

自分は、この人が自分の家を訪ねてくれた時には、わづかの事で留守をした。で、自分が、この人を訪ねて行くと、あいにく又この人が留守だつた。

この人は東京に一寸出て來て、勿卒として歸つて行くらしい。自分は今度はもうこの人には逢へない友と言ふ感じが、しつかりと胸に起つた。一種の哀愁が滲みる

やうに、心を襲つて來た。

その七

「××君。僕の母は遂に亡くなりました。寂しいつらい一生でした。唯一のたよりにして居た僕にも逢はれなくつて、此世では何の慰も得られなくて、只辛苦の間を戰つて逝つたのです。思へば僕の位、母に對して不孝であつた兒もないと思ひます。この手紙が君の手にとゞく頃、僕はなきがらの前で泣いてゐます。篠ノ井の停車場で」

これもはがきである。自分と非常に親しかつた友人が突然歸國した。その時は丁度夏の初めで、互に學年の試驗の始まらうと言ふ處であつた。

この人とは、下宿も近所であつた。互に苦しい勉強をしなければならぬ時が來て居るので、四五日往かずに居ると、突然このはがきが來た。しかもこれはその人の

鄕里信州に歸る途中の篠ノ井と言ふ處から出て居る。

自分は「ヘエ、もう信州に入つてるんだ」と思ふと、その方の空が見られるやうな氣がした。とにかく思ひがけ無い事が、突如として目の前に出た。不意に大きい響が耳を打つたやうに、茫然となつた。

その八

「暑さは追々强くなつてまゐりましたが、兄樣は如何ですか、御丈夫の事とは存じます。が、一寸伺ひます。私は毎日本を讀んで日を送つて居ますが、此頃は齒が惡くつて、虎の門の榎本さんと言ふ齒醫者に毎日通つて、昨日やつとよくなりました。惡い齒が五本でした。私は四月から兄さんに手紙を差上げようと思ひまして、書くのですが（中略）

「此間の二十八日に、大文學會がありました。私は普通論文に出ました。ほん

とにいやでしたが、一生懸命でやりました。題はキリスト敎と言ふのでした。又いろ〳〵の事を致しました。私はほんとに嫌でしたが、皆さんが大變褒めて下さいました。

祖母さんの御病氣は大變宜しいさうで、私はほんとに嬉しいことと思ひます。けれど、この前の外出日に歸りまして、父樣に本當に叱られました。私は半日泣きました。祖母さんの御病氣は私隨分心配致しましたが、只神の御心のまに〳〵と思ひまして、毎日祈つてました。けれども文學會の作文など、色々の事で私はほんとに忙しくつて、お見舞の手紙を出しませんでした。それやら、私が一向、祖母さんの御病氣の事について、何とも言はないのやらで、父樣は大變怒つていらつしやるのです。それで、お前は祖母さんの御病氣が心配でないかと、おつしやるのです。それは心配して居るのですがと言ひましたが、如何しても本當にして下さいませんで、一體キリスト敎の信者には愛と言ふ事が無いと申されました。私はこんな事から、キリスト敎の躓をさせるやうな事をしたと思ふと、殘念でたまりません。

又、お前は誰が許して信者になつかたと申されるのです。私は兄さんに御相談したのだから、それでいゝと思ひましたが、父さんは親に相談しないで勝手な事をすると言つて、それは私は如何したらいゝかと思ふ程、怒つて居なさるのでした。私ほんとに悲しかつたのです。けれど神樣と兄樣とがゐて下さると思つて、猶泣きましたが、又嬉しく心强かつたのです。

ほんとに私が惡かつたのですが、もしかすると、私の望は遂げることが出來ないからうと、其をばかり心配して居ます。私の決心はもう變へる事は出來ません。私これは必ず神の御心と信じます。私の身體の惡いのは、神樣が此の目的でなさつたと、喜んでます。

私、ある時、通學生が大勢居る處で、皆に笑はれた事も、つい十日位前にもあ

ります。私其時ほんとに悲しくつて、何とも言へませんでしたが、兄様のお手紙の中に、神を祝せよと言つてあつたのを思ひ出して、たゞ笑つていゝ顏をしてましたけれど、私の肉體が弱いのか、只悲しさが込上げるのです。（下略）」

この手紙は、自分の女の一友人から貰つた手紙の一節である。この人は、自分の友人の妹だが、自分がキリスト敎の洗禮を受けて一年ばかりした時に、知り合になつた、神經の鋭い、色の青い女であつた。不具と目に立つ程ではなかつたが、身體の發育が惡かつた。

そのやうな事で、心が始終、脅えて居るやうな人であつた。隨分、ひがみも强かつたが、自分が宗敎に入つた始めの嬉しさで、この人を誘ふと、この人は非常に熱中した信者になつてしまつた。

さて、その後に起つた第一の迫害（と言ふと、大きすぎる事だが）の時によこした手紙がこれである。

自分はこの手紙を讀んだ時に、明かにその女の友人が、學校の人々の中に居て、馬鹿にされて居る姿を目に浮べた。そして心中に、目には見えないが、その一人の弱者を中に圍んで、毒言を弄する少女達に向つて、怒を感じた。この時にこの女は學校の寄宿舍に居たから、すぐ馳けて行つて、逢はうかとも思つた程、感情が激するのを覺えた。

且つ、この人の洗禮を受けると言ふについては、自分はその家庭にさう重大な事件と見られるとは思はなかつたが、この手紙を見た時に、成程、その兩親の心中に入つては種々な事があると深く思つた。家庭の中に、ある外國趣味の勝つた宗敎に對する、嫌惡の情。子女が自意識を以つて生きると言ふ事に對して、親が無意識に感ずる反抗——自分の手の中のものと思つたのが、何時の間にか自分勝手の事を始めた——と言ふ事に對して起る反抗。これ等の心持が胸に映つた。

その九

「水戸に來てもう六日。毎日ぶら〳〵し居ります。昨晩は雨の中を芝居見に行きました。浪花節芝居とか言ふのださうですが、私なんかにはちつとも面白かどざいません。

今日は歸る、明日は歸ると言つて居ますが、會つたので、引き止められるとなつかしくつてぐづ〳〵になります。

今朝は霧が筑波山にいつぱいかゝつて居ります。「お才」が思ひ出されてなりません。二階の窓から、筑波の方を眺めても少しも見えません。何だか寂しいやうなつかしいやうな、お才と言ふ人が、あの山の下に居るやうな氣がしてなりません。今日は何處にも行かずに、一人で二階に居ます。」

これも、或る女の友人から來たはがきの一つである。この人が姉に當る人の家に

と言つて水戸に遊びに行つて居る中に、一日のびに延びた後で出した葉書である。雨が降る中を、浪花節芝居に行つたりして見たが面白くなかつたと書いてある。もう少しは退屈して來て、何を見る氣もしない。が、久し振りであつたので、先方の人達が懐しがつて、もてなしてくれる、それに此方でも懐しく感じると言ふので、さう言ふ心持の隋力で、引ずられて居る處が感じられる。

終の方の處で「お才」とあるのは横瀬夜雨と言ふ新體詩人の作で、哀愁を含んだ歌、それに舞臺が筑波山の下にとつてある、「越後出てから常陸まで、泣きにはろ〳〵來はせねど、彌彦山から見た筑波根を、今は麓で泣かうとは……」など言ふ句がある。雨の降る日に、旅に來て、居心地の落ち付かぬ家の窓から筑波を見て思ひ出す、と言つたやうな心持を味つて居るのが感じられる。自分はこの人の倦んだ心持と一所に、哀愁の起つて居るのを見た。

讀者諸君が、かりに、この著者自身の境に身を置いて見られたらば、そして、前

に掲げた數通の手紙を讀まれたらば、而して、更に諸君自身で受け取られた手紙を繰り返して讀まれたらば、手紙と言ふものに對して、自ら、從來よりも深い興味を感ぜられるであらう。

去かし、凡てこの一人と一人との音信には、たゞ文面の上の面白さに加へて、その

背景になつて居るもの

が、その文面に映つて見える面白味と言ふものがある。この事は更に、後章の手紙の趣味と言ふ條に詳しく書くから、こゝには略するが、手紙と言ふものが、直接に人の胸に印する印象は、又その背景の力にある。

諸君は、かくの如き事を容易に了解されるであらう。肉身に送る手紙は、例へば、拙劣な不備な手紙でも、相當に効果を奏するではないか。

けれど、これ等は特別の事だから、それを以て、手紙の「力」と言ふものに云々すべきでなからう。

結局人格問題

手紙の効力――手紙が人に與ふる印象について多くの言語を費したが、結局はその書く人の人格の問題に歸着する。これは多く言ふ必要はあるまいと思ふ。凡ての遊戯にしろ、藝術にしろ、そのする人、書いた人の人格、性情が、その行爲、作品の上に表はれて來ると言ふ事は、如何なる人も疑ふ事はあるまいと思ふ。

靜かな情の厚い人の手紙は、やはり情の厚い靜かな手紙だ。種々の性情人格が、その書かれた文字の奥から滲み出して、人の胸に映る。

中には、手紙が特別に上手な人がある。丁度、俗に言ふ、「口說上手」と言ふ、一寸人にものを言ひかけるにも、或特別の魅力を持つて居る人がある。夫と同樣に、

その人の手紙に、特別の魅力のあるものを書く人がある。見る人が見たらば、その白粉をぬつた文句、厚い着物を着た文句の奥にも、隠れたその人の性格がすかして見えるものである。だが多くの人は欺かれ易い。「羊の皮衣を蒙つた狼」と言はれてある言葉通りに、この奥にかくれたものを見る人は少いものだ。それは全くその人の人生に於ける經驗に外ならない。これ等の問題はここに說いたゝけでは不十分であるが、凡て、人々が世に處して行く場合に、人と對しても、その人を理解したいと思つて、努力する。それと同樣の事が手紙を讀む上にもあると言ふ事を忘れてはならぬ。

これが、人が世に生きて行く上に多く心を費す問題であると同時に、又、手紙の往復の上にも、その効力が尋常一樣のものでなく、その中に自ら、變通の道がある所である。

第四　手紙の趣味

△手紙のバック——△青春の頃——△旅に出て——△心の寂しい時。心が強い打擊を受けた時——△手紙に特別な愛著心を持つて居る人——△美しい手紙——△花言葉——△花束

手紙のバック

前の章にも述べたが、手紙に向つて居ると、誰でも、其受取つた手紙には、必ず多少の背景が付いて居る事を知る。背景だけ言つては不十分だと思はれる。背景と言ふのは、その手紙を書いた人とか、その手紙を書いた動機とか、又はその書いた場合とか言ふものを、凡て集めたもので、手紙を受取つた人には、其の手紙を書

いた人、その手紙の書かれた場合等について、種々の聯想があらう。

例へば、前に掲げた數通の手紙の中、第五番目の、自分が旅行中に、すぐ近所の山に居た友人から受取つたものには是だけの背景がある――この友人は自分とは中學時代から始終接近した生活をして居た。それが別れてから五年ばかり逢はずに居た。處で、五年振りに一寸逢つて、數日の間一緒に暮して居た。そして一緒に上野から滊車に乘る筈にして居たのが、行きちがひになつた。その人が、少し隔つた、やはり近くの山の上に居て、自分が紹介した友人の爲めに便宜をはかつてくれ、そこで自分の噂をした事を書いて託してくれた。これを見ると、自分達が以前に一緒に生活して居た自分の事が思ひ出される。

且つ、自分も旅に居る時であつたので、周圍の情景にさまたげられる事が少く、單純にその心持を感ずる事が出來たのである。自分はこの無雜作な手紙を讀んで、この友人との七八年來の交友の間に、醗酵して居た全空氣を感じたのである。

あまりくどくなるから、この項はも一つの、最後のはがきの背景について書くだけに止めて置く。さ、かし、讀者はこれにだけでも十分に、手紙と言ふものに、其背景がどの位、重大な勢力であるか――別の言葉で言へば、手紙の興味の幾何重大な部分が、この背景に因つて來て居るかと言ふ事を、了解される書が出來るであらうと思ふ。

で、最後の手紙を書いた人は、自分の年の若い友人である。まだ、極く極く年の若い、苦勞の無い人である。その人が、東京に遊學に來て居る中に、水戸に親戚があつて、そこに客に呼ばれて行つた。見知らぬ處に行つて、好奇心を動かして暮して居た間は短かい。賑かな東京に馴れた心持は、田舍町の單調な中にすぐ飽きて了ふ。その倦怠の情と、雨に降られたわびしい光景との中に居る、若い女……その某子と言ふ、肥つた色の白い、いつも面白くつてたまらぬと言つたやうな顏をして居る若い女――此の自分の見得た其の人の容貌、平生の動作が、この背景を大に手

傳つたのである。

處で、手紙にとつては、背景と言ふものが、非常に重大なものだ。手紙の價値、力と言ふものの大部分は此の背景から出來上つた者だと言ふ事を自分は極言する。如何なる人と雖も、手紙を受取ると同時に、その手紙を書いた人を想ひ起さぬ人はあるまい。さらに言ひかへれば、それが手紙の背景だ。が、又これが手紙に複雜した趣味の籠つて居る所以である。一本の手紙の封を切る時には、同時に、その差出人に對する、その人の種々の記憶が胸に起る。愛したり、惡んだり、樣々の心を以て、その人に向つた、その心持を基礎にして、その人の言葉を聞く。たゞ自分とは關係の薄い文章に對するのと自から差別があるのは當然ではないか。

これが、多くの人が手紙に特別の執着心を持つて居るわけである。

この、知人の心持を聞かう、親しい人の言葉を聞かう、と言ふ願は、人間の凡ての年齡、階級、職業に渉つて一樣にあるものである。が、ここに、手紙を特別に面白く感じ、特別に愛著する或る年齡の頃と、或る趣味の人とがある。

青春の頃

自分も十八九から、二十一二の頃には「郵便！」と投げ込んで行つてくれる、あの手紙程、嬉しくなつかしく思つたものは無かつた。丁度、その頃の年輩の人々は凡てさうである。凡て手紙の戀人である。その當時自分が手紙の戀人であつたと同樣に、凡ての人が手紙の戀人である。

處で、此年頃の人々の感情は、或る小數の人々の外は大抵、單純な、無邪氣なものだ。そしてその心持が、單純であるだけに、まだ世の中の苦い味を味はされて居ないだけに、遊戯的になる。たゞ、なつかしい嬉しい心持だけでなく、面白い玩具が欲しい。そこで、畫はがきや、手紙の紙、封筒などに、種々な裝飾をするやうになる。素直に自分々々の心持を述べた言葉だけでは滿足が出來なくつて、氣取つ

文句や何かを使ふやうになる。手紙が單純な自分の感情を傳へ、心を人に訴へるものでなく、遊戯の道具になつて居るものがある。

と云つて是で以て、書はがきや、その他のものを愛する心持全體をこんな事だと言ひ切つてしまつたのではない。この若い年の頃に、そのやうなものを特別に愛するといふ傾向はここから來たと言ふのである。

旅に出て

吾々が年をとつた後と雖も、旅に出た時には、特に手紙が懷しく感じられるものだ。旅の先からその人の屬して居る家庭の人々に送つた手紙。家庭の中から、旅に出た家旅に送つた手紙。それを受け取つた人の心持には、平生見飽きる程馴れては居るが、自分が安らかに、心の靜まる家を思ひ浮べると、心おきなく、極めて自然な情愛が湧いて來る。自分の巣を思ふ心持だ。

同時に又、家庭に殘つた人達も、旅に出た家族に對して、自然心を集めてその身の上を思ふものである。

それから、旅に出ると、誰でも特別に手紙が書きたくなるものである。單に、その家庭に向つてのみでなく、友人だとか、知己だとかに對しても、多く書きたくなる。それは忙しい用事に責められて居る人は例外だが、旅に出ると如何しても、その周圍と同化して行くだけのなじみが無い。どちらを向いても知らぬ人の顔ばかりだ。その時には誰の胸にも強い力でもつて、知人の顔が浮び出て來るのだ。それに加へて、四邊の目に映るものは、凡て見なれぬものである、心が生々として來る、これをたゞ獨りで默つて見て居られなくなるのが情である。これも旅に出ると、多く手紙を書く原因だ。

さて、次に手紙を多く書く場合は

心の寂しい時。心が強い打撃を受けた時

である。

この二つとも、その場合は千差萬別だ。人々の心情、性格、境遇に依つて違ふ事だが、ともかくも人は、心の寂しい時には、自分の思ひを人に訴へずには居られないものと見える。誰でも、適當に相手を作つて、その人に訴へ、その人に依つてその寂しい心を慰められようとする。これは凡ての人の心持である。斯う言ふ時に、人は多く手紙を書くものである。そのやうな事の例については、讀者は多くの事實を知つて居られるであらう。だがこゝに

手紙に特別な愛著心を持つて居る人

がある。その人にとつては、青年の初々しい心、それだけではなく、手紙に向つて特別の愛著心がある。

幾歳になつても、人の情愛のある言葉を聞き度いと思ふのは人情だが、この人々の中には、それだけでなく、手紙といふものに特に愛著心を持つて居るのである。

美しい手紙

今迄述べた人々の心持は、手紙に對するにたゝ相手の情を追つて行く、ゑかし美しい者を愛すると言ふ心持で、何時となしにそれらの中にも趣味が發達して來る。或は美しい畫はがきに、極めて簡潔に、ゑやれた一句を書いて人を喜ばせる。或は自分の嗜好に特にかなつた紙を使つて見る。それ等の趣味は發達するに從つて種々の方面に向ふ。自分はその一例として趣味のある花言葉（Flower Language.）と、それを應用して作つた花束（Boupueto.）について、一通り書いて置かう。

花言葉

昔から、ペルシャだとか、印度だとか、トルコだとかの國々では、斯う言ふ習慣がある。是は花が物を言ふのである。この國の人達は自分の思つてる事を、人に傳へるのに、文字で書いた手紙を送らずに、或る意味のある花を集めて、人に送る。すると、受取つた人はそれを見て、送つた人の心を讀むのである。即ちこの國では、花に種々な意味が附いてるのである。その意味で可成自由に自分の意志が人に傳へられたのである。

例へば、こゝに密柑の蕾を人に送ると「希望」、と言ふ心が表はされて居る。受取つた人達は、それを其の身に引き當て、その人樣々に、その意味を解釋する。黄い花のあかしやを送ると、それは「極く祕密な戀」と言ふ心持を表はす。金盞花は絶望、向日葵は不變、恒心、ばらは美麗、美人、……と斯う言ふ風に、夫々、花には意味がある。

そして、それで以て、巧みに自分の意志を人に傳へられる。友情も、戀も、怒りも、輕蔑も……、それは丁度言語と同じ樣に、その花一つで、双方の人々が喜憂し、同情し、怒り、なげく。

で今、イギリス語やフランス語に、花言葉と呼ばれて傳はつて居るのは、このペルシャや、印度などで昔から用ひられて來たものなのである。それは例の有名な十字軍の時に從軍した人達や、又は基督の生地に順禮に行つた人達が、その旅行中に見聞して、持つて歸つたものに、後から、バイブルの中の古實だとか、その外の傳說などを、種々と加へて、斯ういふものが出來上つたらしい。從つて、それには西洋の人の頭には傳說的に特別の印象を持つて居る樣な意味もある。花を見て、直ぐ鋭敏に心が動き、それから直ちに出來た意味では無いのが多い。

先づ、その樣な理窟は後に廻はして、それでペルシャの貴婦人達は、この事に非

常な趣味を持つて居ると言ふ事である。種々な花を集めて來て花束を作つては、喜びだとか、怒りだとか、戀だとか、友情だとか、自分達の樣々な心持を表はす。例へば斯うである。ペルシャではチユリツプは大抵赤色の花が咲くのだが、その花瓣の底の處がまだ黑色を帶びて居る間は（花の開き切らない中には黑色を帶びて居る）熱心な戀の心を表はすとされて居るので、その花を戀人から送られたとすると、其時には斯う言ふ心が表はれて居る。

『この花の樣に、私の顏はほてつて、私の心は燃えて居ます。』

と、まあこんなことで、互に自分の意志を表はす事が盛んに行はれて居る。

次に印度に來ると、この國では、この樣な事のオーソリチーと言つてもよい位で、この遊びが「詩歌の搖籃」として尊敬されて居る。種々の花や果實を取りまとめて、其心に思つて居る事を表はす術に至つては、アムボイナ（印度モリニーカス群島中の島）の娘達は天才を持つて居ると言つても好い位である。去かし、この國の花言葉には、今、イギリスなどに傳つて居る、トルコ其他の諸國のものとは、多少の相違があるさうだ。

さて、次には某婦人の話に、トコルではこれを利用して、筆を取らずに、有ゆる感情を發表するといふ事である。更に進んでは、トルコの婦人達は、祝事、宴席の喜びや、招待するのに手紙を書かずに、又花も用ひずに、美しく刺繍した手巾を花の樣な形に卷いて、其に夫々の花の香のする香水をふりかけて、手紙の代用をさせると言ふ事である。

あかしや（針えんじゅ）　友情。
あかしやーばら色。又は白　優美。高雅。
あかしやー黃ー　隱し切つて居る戀。
あまりりす　誇り。怯懦。かがやく美人。
あれもれ（白頭翁）　病氣。期待。一心に待つて居ました。
あれもれ（園に作れるもの）　捨てられた。
紫羅欄花　愛情の束縛。
にほひ紫羅欄花　不幸中の眞實。
蘭　苛酷。溢酸。
蘭ー白ー　寃酒の香ひ。

齋—深紅—	荒れた心。人嫌ひする。情人。
蘆	やさしい。音樂。
葉のさけたる蘆	軽忽。
圓錐花のある蘆の束	音。
花の咲いて居る蘆	天國の祕語。
朝顔	切なる愛情。
あぢさひ	氣の知れない。
鳶尾	消息。
同—紫—	南國。
無花果樹	論爭。
無花果の實	炎。
いらくさ（猛烈なる）	誹謗。
いちご	二枚の舌。
蛇いちご	母の憂。
銀杏	不思議。長壽。
梅の樹	忠實。貞節。
梅—野生の—	獨立。
苜宿（クロヴー）	頽德。感驚。
同—四ツ葉—	幸運。私のものにおなりなさい（廣い意味で用ゐる）
同—赤い花—	勤勉。
同—白い花—	私を思つて下さい。
翠菊	多數。追想。流暢な辯説。
翠菊—白—	よごれた顏。
翠菊—赤—	欺された。
翠菊—紫—	嚴のよつた女。
金雀花	嚴遜。巧妙。
豌豆	心の清らかな女。
豌豆のつる	よりかかる。

豌豆—紫—	しつこい。（輕い意味の）
豌豆—實—	あなたの親切なお心で私は生々しました。
おだまき—紫—	必ず打勝たうと決心した。
柿	自然の美の中に我れを弱れ。
カーネーション—絞り—	拒絶。
河原鼎粟	獨身。
キャベツ	利益。
金魚草	憶斷。
マリゴールド—圃の—	不安。
菊—白—	眞實。
菊—大輪の作り菊—	化粧し立てた女。
菊—自然のまゝに咲いた花（咲くまゝに咲かせた花）	零落した貴人。
豌豆—白—	私は樂しい夢を見て居ます。
含羞草	銳感。柔しき感情。
おだまき	愚。精神錯亂。
おだまき—白—	ぼやけた心持。
カーネーション—深紅—	あゝ我が戀しき人の爲めに。
カーネーション—黃—	嫌惡。
桔梗	判斷。
マリーゴールド	悲哀。
常春藤	信實。結婚。
菊—赤紅—	私は愛する。
菊—黃—	かすかな戀。
菊—野菊—	恥づかしさ。
九輪草—緋の—	貪慾。

栗の樹　私が判じて御覽なさい。

罌子粟―深紅色―　贅澤。

罌子粟―八重　妄想的の放縱。惡夢

罌子粟―花の落ちた跡―　毒のついた唇。

罌子粟の葉　夢が醒めた。意外。

牛蒡　隱謀。毒殺。

櫻草―野生の―　面倒な事。さばらない

櫻草―赤―　で下さい。

石榴　極く若い人。

紫蘇　人の助けをからなかつた幸福。

羊齒　愚鈍。

睡蓮　家庭内の德義。

睡蓮―夜咲く花―　眩惑。魔法。眞誠。

純潔な心。

密會。

鷄冠花　虛飾。假粧。

罌子粟―赤―　慰藉。

罌子粟―白―　眠。自分の零落して

罌子粟の蕾―青い夢で包　行く妻我心の消毒劑

まれたる　神秘（凶運、凶事が

苔　含まれて居る神秘）

サフラン　母の愛。

櫻草―園に作れるもの―　適切な注意。

櫻　都馴れた田舍の女。

櫻―白―　善い育ち。

石榴の花　詐僞。

ジギタリス　熟した雅致。

羊齒―花さける―　不實。

睡蓮―空色―　昏睡。

スヰートピー　子供の瞳。

心こまやかな快樂。

水仙　尊敬。

石竹―赤の八重―　清く熱心な戀。

石竹―白―　鋭敏。才能。

素馨　可愛らしい。

素馨―黃色の―　美德と雅致。

馬鈴薯の花　穩に表はれかけた戀。

ヂエラニユーム―深紅―　恍惚。

椿―紅―　秀れた島が曇にかゝらないで居る。

天竺牡丹（ダリヤ）　輕浮。

ばら　ラヴ。

ばら―深紅色の―　さつと顏を赤らむ樣な

ばら―白―　恥づかしさ。

ばら―黃―　私はあなたにとつてはねうちがありますよ。

花言葉　愛情の衰へ。嫉妬。

石竹　勇敢。

石竹―一重―　清純な戀。

石竹―花瓣の大きく垂れたもの　肉慾（この石竹はなでしこをも含む）

馬鈴薯　仁慈。

ヂエラニユーム　詭計。

ヂエラニユーム―繪にかいた　敏捷。

椿―白―　圓滿な愛嬌。

丁子　尊敬。

ばら―石竹色の―　美くしい顏色。

ばら―花の澤山ついた―　美德。

ばら―刺のない―　いちはやき戀。

ばら―白（凋れたの）　ちよつとの間の印象。

ばら―白と赤とを一束にしたもの。一致。

ばら—赤ばらの蕾—　清く且清らしき。
ばら—苔のついたばらの蕾—　愛の自白。
蓮の葉　蔓背。
ひるがほ(ニンポルヴラス)　禁制。情緣。
ヒアシンス—白—　つゝましやかな可愛い心。
鳳仙花—赤—　私に觸つて下さるな。氣早な。
柳—創劍したる—　許された愛。
白楊—黑—(ブラックポプラ)—　勇氣。
矢車菊　優雅。
虎耳草　愛慕。友情。
百合—黃—　僞り。華美。
林檎の刺　人を欺く魔力。
林檎の花　撰擇。名譽は彼に美を善さを告ぐ。
ばら—白ばらの蕾—　少女時代。
蓮の花　はれつけられた戀。
パンジー　思想。
ヒヤシンス　遊戯。
雛菊(デージー)　無邪氣。
木爪　誘惑。
松　哀憐。
松—脂の出て居る—　哲學。
柳—水邊の—　自由。
白楊—白—(ホワイトポプラ)—　時。
山吹　待ちかれた。
百合—白—　純正。親愛。なつかしさ。
蘭　美人。

花束

花束の作り方と言つても、別に何もない。たゞ任意の花を、或る數だけ集めて一束にすると言ふだけである。

普通この花束と言ふものは、近來、何處でも花を賣る家では、期節々々に就いて、種々な束を作つて賣つて居る。處で、花言葉を應用した花束と言ふと、たゞ單純に美しい花を集めたと言ふのでは無く、あの多く花が、夫々に意味を持つて居る、あの花言葉を、その花束を作る人が必要に應じて配合させ、さて、それを集めて見ると、自ら或る心持が、その中に表はれて來る。言ひ換へて見ると、手紙を書くと同樣の心持であるのである。例へば、此處に廣葉のレンリ草(Everlasting-pea)と、夕顏の花と、勿忘草とを一束にして人に送つたとすると、その花束には斯う言ふ意味が隱れて居る。『今夜逢つて下さい。忘れちやいけませんよ。』これは

廣葉のレンリ草――逢つて下さい
夕顔――――――今夜
忘れてはいけませんよ――勿忘草

と言ふ風に各々花に意味を持つて居るからである。と、斯う言ふ風にして、この花を以て、手紙の代用をさせる事が出來るのであるが、處でこれを使ふのには、その使ふ人が、互々、夫々に工夫をさせる必要がある。もとより花言葉の花の數は極めて少い。それで持つて、複雜した種々雜多の心持を表はすのであるから、出來るだけその言葉を活用させて、樣々の場合にあてはめて使ふと言ふ事が必要である。それは丁度、暗合の符謀を使ふ時と同じやうな苦心が入るのだと思ふ。

それで、この花言葉を使ふ事にかけては、セイロン附近にある或る島の娘や、トルコの婦人は天才を持つて居ると言はれて居るそうだ。それで、この花を使ふのが進歩して居る國では、花が無ければ、花を描いた畫を使ふ事もある。尙ほ進んではその花の形をハンケチで作り、その花の香のする香水をそれにふりかけて代用すると言ふ處さへある。で、花が一寸得にくい時には、その代りに花の繪を使ふのもよからうと思ふ。

花束の作例

それで、こゝに一つ花束の例を五つ擧げて見る。これは前に述べた事を更に明にする爲である。

一――『あなたは、むら氣で、無分別で、僞をつく。だから人に嫌はれるのだ。』

むら氣――――アベーチナ
無分別――――巴旦杏の花
僞をつく――――鷄頭
嫌ふ――――ベーシル

それで、アベーチナと、巴旦杏の花と、鷄頭と、ベーシルとを一束にして、この意味を表はす。

二――『欺されない用心をなさい。危險が近づいて居る。おはづしなさい。』この花束は夾竹桃と、白のフライッラップと、石楠と蒲公英（或はあざみの一種）を束にする。

用心――夾竹桃
欺く――白のフライッラップ
危險が近づいた――石楠
外せ――たんぽゝ

三――『貴方が知らぬ顏をして居るので私は悲しい。あなたが冷淡だから私は氣が沈む。』この花束は紫の馬鞭草と、芥子と、枯葉と、アグナス、カスタスとを集めたもの。

あなたの事で私は悲しい――紫の馬鞭草
無頓着――芥子の種
氣が沈む――枯葉
冷淡――アグナス、カスタス

四――『嫌がらずに降りて來て下さい。さうして獨りで淋しがつてる私を慰めて下さい。』この花束はエスクスコッイアと、ヤコブの梯（ヤコブス、ラヂア）と、梨の樹と、ヒースとを集める。

嫌がるよ――エスクスコッイア
降りて來い――ヤコブの梯子

慰める――――――梨の樹
獨りで居る淋しさ――――ヒース

五――『私はあなたの好奇心を失望させるのが好きだ。』この花束は赤い薔薇の花と、山梅花と、スヾカケの枝とを集める。

すきだ――――――赤い薔薇
失望――――――山梅花
好奇心――――――スヾカケ

以上の例は、ほんの僅少なもので、たゞ花束を作る上の心當りになるやうにと思つてである。これで見ると至極簡單であるやうだが、それでも中々工夫が要る事と思ふ。

更にも少し簡單な事では、この花言葉を覺えて諸君が用ゐられる簪、或は書はがき、又は折々の愛する花の贈りものなどに、自らその意味を付けて、希望をかたり、隱した心を傳へ、又は自分の思ひをやる事も出來るだらうと思ふ。

この樣な事は、一時、この花言葉が初めて我國に譯された時分に、學生の間で種種の事が行はれたと言ふ事を覺えてゐる。

花言葉の變化

さて次には、花言葉の變化の方法について要點だけを述べて置く。

で、この變化と言ふのは、一つの花があるとする、處で、その花の意味に反對するやうな――例へばその葉をむしるとか、針をとるとかすると、その花の意味が自ら變化して來る。即ち反對の意味が出來て來のである。

それについて、例をあげて說明をすると、薔薇の芽の針を取つてしまつて、葉だ

け殘して置くとする、さうすると『もう私は恐くはない。私には希望がある。』と言ふ事になる。即ち刺は恐怖と言ふ事、葉は希望を意味するからである。もし、葉と刺と兩方を取つてしまふと、薔薇の芽は『もう、希望も恐れも無い』と言ふ事になる。斯う言ふ風に、それ〴〵、その花の固有の意味に依つて、それの形を變へると、種〴〵の變化を作る事が出來ると思ふ。

次には、花束に於ける花の位置に依つて、種々の意が出來る。例へば花束のとつてんに持つて行つて、マリーゴールド（孔雀草の一種）を置くと、「心中の苦悶」と言ふ事になるし、底の方に持つて行くと、「知らぬ顏」と言ふ事になる。花が右の方に傾かしてある時には自分の心持を表はす——即ち「私」と言ふ時。左の方に傾けると、「汝」「あなた」と言ふ事になる。

又英語でイエス（Yes）と言ふ時、「左樣です」と言ふ時には、花束を渡す時に、一寸こちらの唇につけて見せる。ノー（No）いゝえと言ふ時には、花束の中の花の花瓣を一寸むしつて置くか、或は切つて置く。

尙ほこの外に、西洋では手紙の終に自分の名を署して置いて、その名の下の處に「×」符號のやうに斜に十字を書く。これはキッスの去るしである。それは非常に情の激した手紙のには、幾つも幾つも書いてあるのがあると言ふ事だ、戀の手紙などには殊に多いのであらう。

このやうな手紙特別の符號のやうなものを、自分はこゝに集めたく思つたが、出來なかつたのは殘念であつた。

さて以上を以て、自分は上篇の

結　末

とするつもりである。

自分は不十分ながら、手紙と言ふ事について、自分の從來思つて居た事を、はし

から説いて來た。自分は從來の作法のやうに、如何して手紙を書くかと言ふ事は書かなかつた。去かし自分の希望は、讀者諸君が手紙と言ふものを理解されるやうにと願つたのである。手紙の書き方と言ふやうなものが、特別にあらう筈が無い。たゞ手紙を書くのが下手だと言ふ人があるなら、その人は手紙と言ふものを理解する事の出來ない人だ。

誰が、自分が言はうとする言葉が口から出ないと言ふ人がある。手紙も同樣である。手紙と言ふものがよく會得されさへすれば、自由なものが書けるのである。自分はこゝまでは、それを目標として書いて來たのである。

さてこれからは、作例に移る事としよう。

或る人々の往復した手紙

或る人々の往復した手紙

こゝに、自分は假に或る人々の往復した手紙に擬して、作例を書かうとする。之かし、斷つて置くが、自分は何々に誘ふ文と言つた風に、從來の作例のやうなものが何のやくにもたゝないと思つて居る。又一方には、勿論、この世間一般に渉つた事について、凡て、作例を書くと言ふ事は自分の智識も及ばぬ事だ、且つ又、この小冊子ではゆるされぬ事だ。だから、自分は思ひ付いた十數種の題目について、成るべく、各種の人が書いたものに擬して書いて見ようと企てた。

男の手紙もある。女の手紙もある。長いのも、短いのもある。たゞこれは讀者諸君の參考の具として備へるだけだ。

嫁いだ女から

△幼い時分から、兄のやうに親しくした男へ

今日はひどく風が吹いて居ます。東京の町は埃が、黄い烟のやうに立ち迷つて居るのです。私はやはり朝から晩まで時分の部屋の中に閉ぢ籠つて、ぼんやりして暮して居ます。

あなたは覺えていらつしやるでせう？、私は實家に居る時分には、よくめそ〳〵泣いて居る子でしたわね。あの時分は何故あんなに、何でもかでもが悲しかつたのでせう。ほんとに今思ひ出して見ると、不思議だわ。

母は、これはお前の性分だ。性分だから仕方が無いが、これでは、お嫁に行つてから困るから、もつと氣を丈やんと丈つかりと持て、女でも武士の家に生れた以上は、いざやとなれば自害して死ぬやうな事が出て來ようと、そんな事をあたりまへだと思はなければならない、昔はそんな事を朝晩に言ひ暮して、娘を育てたものだなんてよく言はれましたわ。あなたも、折ふしは連累になつて、種々な事をお聞きなすつたわね。その私が如何でせう？。

ほんとに、私この岸の家に嫁いで來てからは、お目にかゝる事も出來なくなつてしまひましたわね。もう半年になりますが、たゞそわ〳〵して暮してばかりしまひました。丁度、同じ時分に遠くに行つておしまひになつたあなたに對しては、たゞ、當座まかせの事を書いてお送りした、それだけでしたわ。私ほんとにすまないと思つてますよ。丈かし、本當は（ごめんなさいね）私もそわ〳〵してばかり暮してしまつたんですの。人間つて不思議なものね。私この頃はばつたりと自分の目の前に垂れ下つて居た幕が切つておとされたやうで、何だか世界がまるで、一まわりぐるつと廻つて變つてしまつたようです。此頃はそんなに泣き度いやうな心持になる事

はありませんの。

そしてね、前の事を考へ出すと、私、何故あんな事をして毎日日を送つて居たらうと思はれてなりませんのよ。其頃は、何を見ても、その色だとか、形だとかが鋭く目に泌みて來るやうで、すぐ心が誘はれるのです。さうすると、身體中が淋しくなつて、悲しくなつて來るんでしたの。そしては獨で坐り込んでは泣きましたの。でも私は何だか泣くのが嬉しいやうにも思へてましたわ。ほんとに如何した心持でせう？。

今日は主人が昨日から一週間ばかりの豫定で、福島の方に出張いたしました。その留守に、獨りでぢつとして居ますと、心が初めて靜かになつて來ました。結婚してから初めて心が吾に返つて來たんですのよ。はつきりと目があいたやうですわ。さて、斯うなつて種々の事を考へて見ると、ほんとに昔はまるで夢、今とは全く一重垣根を隔てゝ、ものを見るやうな心持がされます。

ほんとにあれは夢でしたのね。あの何とも名は付けられないが、すぐ悲しくなつて涙が出て來た、あの心持はほんとに夢でしたのね。今、斯うやつて靜かに考へて見ますと、ぽつと烟が立つてるむかうにあるやうな心持がします。私は今、全く目の前の幕が切つておろされたやうな心持で居ますの。今になつて見ると、目がはつきりして、何もかもが見えて來ます。

私、今になつてほんとの一人前の人間になれたのでせうか。と、只今も種々の事を思ひながら、泌々と思ふのです。

全く、結婚と言ふ事は、女の身にとつてはツきりと一段落を付けたものですのね。ですが、私、この半年の間、何をして暮して居ましたらう。さう思つて來ると不思議な氣がします。丁度、雜多な響を發する音樂を聞きながら、その中で生きて居たやう。何と言つて、これと心が一つに集まつて居た事は無く、たゞ、その時その時に雜然とした、乏かし、鋭い刺激を感じながら暮して來ました。その刺激は一つ一

つ、どれも明瞭に一つの色で私の心に滲み付きはしませなんだが、何となく、雜然としたその生活の中に生きて居る中に、私は全で、變つた世界の人になつてしまひました。

私の、その何とも名は付かないが、うら悲しいと言つた心持は消えて了ひました。そして、私はこの家の中に――――夫と、姑と、夫の弟妹との間に、私の身體が新しく生れて居るやうでした。私は幸福と言ふ事も、不幸と言ふ事も思ひません。今、丁度目が覺めた赤兒のやうです。

兄さん――――私は一生變らずに、あなたを兄さんと呼びます。あなたも又快く私にさう呼ばして下さると私は信じて居ますのよ――――あのね、私、今日は何もかも言つてしまひ度いわ。私の一身を取り廻はして居る事を、皆、そつくり書いて、兄さんに聞いて頂き度いわ。さう思つて來ると、兄さんが何故、今東京に居て下さらないのだらうと思ひます。何だか、そんな遠くに行つておしまひになつたのが、怨めしいやうに思はれますのよ。女の心持つて、こんな弱い、我儘なものですのね。

あのね、兄さん、私の夫は（私、兄さんに一度是非この家の夫に逢つて頂き度く思ひますの）それは單純な、蟠りの無い人ですのよ。こんな職業には似合はない程、はつきりした人ですの。

私は幸福ですわ。ほんとに私、娘で親の家に居た時分によく自分の幸と言ふ事を思ひましたが、それなんぞとは、まるで別の幸福を感じますの。

もつと澤山、山程書く事があるやうですが、でも今日はこれで、筆を止めます。夫の留守の中に、よく心を靜かにして、又書きませう。さよなら……皆様お身體をお大事に。

別れて後

第一　男より

この手紙があなたの手に届く時には、僕は旅に出て居るんです。もうとても僕は堪へきれなかつたのだ。自分で自分の仕事を續けて行くと言ふ事が出來なかつたのだ。何かしてこの心持を換へなければ、やりきれないと思つたから、僕は旅でもしようと決心した。行く先きは何處にでもいゝ、又、僕の今の心持になつて見ると、何處と言つて當ても無い。たゞ、この東京を出てしまへばいゝのだ。だつて東京にはもうあなたが居ないぢや無いか。

これを、吾々の運命と言ふのだらうか？、私はそんな事を思ふのは嫌だ。運命などと言つて安心する事が出來たなら幸だ。僕はこんなひどい目にあつて、運命だと

諦めるなんてそんな事は出來ない話です。

と言つて、僕等は互の間に寸分も嫌な心持を抱き合ふ可き理由が無い。ね、お妙さん、何故僕とあなたとがこんなに遠くに別れる事になつたのでせう？。

あゝ、こんな事を繰り返して言ふのは、眞實男らしく無い事だ。だが、僕は全くやりきれない。自分の愛する人が、身邊から居なくなつた跡は、こんなにも落莫としたものになつてしまふのだらうか。僕はあの日、丁度あなたの一家が北海道に引き移ると言ふ事を聞いて、慌てあなたの家を訪問したでせう。あの時には、なあに大抵は何かの間違だらうと思ひながら道を歩いて行つた。人間と言ふものは、目の前に死ぬと言ふ事が事實になつて來るまでは、まだおれは生きてるぞと言つて、死ぬと言ふ事をば決して思ふものでは無い。僕も丁度、その心持だつたのです。

で、行つて見ると、間違處では無い。あなたはしよんぼりとして居るし、叔母さんは何だかすつかり落ち付かいで、氣がくるくして居るやうだ。それを見た時に、

僕はもう失望しきつてしまつた。そして突嗟の間に、如何しても今、あなたを貰ひ受けなければ、自分の愛人が奪ひ去られて行くと思つた。と同時に僕はまだ學生で、親がゝりだと言ふ反省が鋭く頭を突いて上つて來た。僕は手を拱いて、あなたが遠くに行くのを見て居なければならぬのだつた。

お妙さんは如何思つた？、あの時のあなたの顏が、あれから僕の目についてたまらない。頭から水をかぶつた人のやうな……しよんぼりとして口もはつきりはきかなかつた——

でも、あなたは心に強い處があるんだ。出立の時なぞは、案外だと思ふ程、落ち付いて居たではありませんか。もう、僕はあの時の事などは書かない。叔父さんの轉任があんなに足元から鳥が立つやうにならうとは思はれなかつた。そんな事は全く愚痴だ。僕はそれよりも、あの上野まで見送つて、「さよなら」と言つた、そして見る〳〵滊車が出てしまつた、その跡、一人心の中で寂寞を極めた感じを抱きながら、しよぼ〳〵と歩いてあしこのプラットホームを出て來た、あの時からの後の心持を、詳しく書き度い。書いてお妙さんの耳に、目に、しつかりと傳へ度いのだ。

だが、お妙さん、別に僕の身には何の、それこそ寸分の變りもありはしなかつた。身體は平穏で順序よく、お妙さんが前に見て居た通り、そつくりで續いて居る。毎朝、學校に行き、定つた時間の時に歸つて來……たゞ一つある、心が寂しい。何時でも隙さへあればこの心を賑かにし、温かにする事の出來た家が、あれが無くなつた、その寂しさが始終僕の心を襲つて來る。その爲めか、僕が恐ろしく沈鬱になつた　前から兩親の前でも、叔父さん達の前でもさう快活な僕では無かつた。それが一層淋しい顏をする樣になつたらしい。兩親はそれを見て、何か身體を壞したのでは無いかと思つて心配して居るらしい。それで、母が心配さうに如何したのかと訊く。僕はたゞ如何もしないと答へるだけだつた。その中に日が經つた。そちらから落ち付いたと言ふお手紙も着いた。僕は愈々たまらなくなつて、今月に入ると母

を説いて、一週間ばかりの豫定で旅に出る事にした。もう永久の旅にでも出るやうな氣ばかりがする。

全く今の僕は何と言つて説明する事も出來ない。この手紙を書くのにしても驚く程餘裕が無い。あれからの事を平坦に書き續けると言ふ事すら中々むづかしい事だ。たゞ徒らに自分の興奮した感情を書くばかりである。如何もあれからの僕の全生活は、この感情の興奮にすぎなかつたやうだ。

實に淋しいものだね。全く始終、近い處に居ると思つて居た時分には、そんな氣もしなかつたが、斯うやつて遠く離れて見ると、何もかもはつきりとなつて來る。殊にはつきり見えるのはお妙さんの顔だ。僕は今迄はよく見て居ながら、そんなにも思はなかつたが、今となつて見ると、それがはつきりと目に殘つて居る。そしてその顔が絶えず、冷い悲しい心を起させる。

僕は何も書く事は無い。今の唯一の心はこの旅に出て、行ける處まで行き、思ふまゝに自分の心を走らせて見たい。たゞそれだけだ。何處までも行け〳〵、この主の無い身體が行く處は何處と定つて居よう筈は無い。

去かし、お妙さん、安心してもいゝよ。僕は心は淋しいので激して居るが、外觀は極く〳〵平靜だから。

返事をくれたまへ。そして叔父さん叔母さんによろしく。　草々

匡

月　日

第二　女より

道中、別に變つた事も無く着きました。着いてから、まだほんの一二日、この間は家の取りかたづけや何かで、何をする隙も無い程、忙しいんですの。

私は昨日やつと、はがきを書きました。あれはやつとでしたのよ。もうたしかにお手元に着く事と思つてます。あれだけでも如何位なつかしいでせう？あれが、日

ならず匡さんのお手元に着くと言ふ事を思ふだけでも、私はほんとに何だかしら安心がされるやうですの。

そして……私は何を書きませう。何も書く事はありませんわ。私の目には何にも見えないんです。私は悲しいわ。悲しい、とたつた斯う言ふより外に何の言葉も無いんですの。

本當に北海道なんていやな處、まだ外には一寸も出て見ないのですから、如何な處だか知りませんが、私には此上も無くいやな處です。私は何も言へません。たゞ嫌です。嫌です。私はたつた獨りで居る處は何處でも嫌に思はれますわ。

匡さん！……あなた……あなたはやつぱり東京にお出でなんですの？。東京が戀しい、東京が戀しい。東京が戀しいわ。やつぱり東京が戀しいんぢや無くつてあなたが戀しいんですわ。（五日午前十一時）

此頃は全く落ち付きませんのよ。それでね、この前の處まで書きますと、私は母に呼び立てられて、片付もののお手傳に立ちましたの、一寸日と時間とを書いて入れて置きましたが、まだ、何かどつさり書く事があるやうで、その儘二日たつてしまひました。今又その先きを書き足します。

私の手紙が行かなかつたら、あなたは如何思つてらつしやるでせう？、その儘何とも思はずに、私と言ふものの記憶がだん〳〵あなたの胸から薄らいで行くでせうか。あなたのお心の中から、私と言ふ影がだんだん消えて行くんでは無いでせうか。私はその何とも言へぬ不安な心持の爲めに襲ひかゝられて居るやうです。何やかやと忙しい仕事にまぎれて居る中はいゝようなものゝ、もし暫くの間でもふつと手をぬく隙が出來て、ぢつとし居るやうな事になると、私はとてもたまりませんのよ。

もう一層死んでしまつた方がいゝと思ひます。こんなにも淋しい事が又とあるでせうか？。匡さん！、あなた！私は幾度斯う言つてあなたをお呼びする事か。

丁度今です。今この手紙をこゝまで書いて來た時に郵便がまゐりました。なつか

しいお手紙がまゐりました。今は七日の午後三時半です。私は自分の手紙を書く事を止して、すぐもう餓えて居る人のやうに、お手紙を拜見しました。あなたは……と私は思はず口走つて、心で驚いてしまひました。何と申し上たらいゝんでせう？……あゝ……私はもう止められなくなつて泣き出しました。

あなたは何處にいらつしやるの。あなたのおいでの處に私は吸ひ寄せられるやうに思はれて居るのですのに、私如何したらいゝのでせう。あなたは何處にいらつしやるのでせう？……あゝ何と申し上げたらいゝのでせう……何卒そんな事をおつしやらないで、東京にゐらしつて下さいまし。何卒……この手紙が着ましたらば、すぐ御返事を下さいまし。妙がどんなに待ち焦がれて居るとかとお思ひになつて、何卒すぐ御返事を。

あゝ、もう何も書けません。口も心も一時に締め付けられたやうで……さよなら

月　日　　妙より

田舎の町より

△都會に居る舊友に

又、失敗した。僕はこの手紙を書くに當つて、心が急いてたまらぬ。何はともあれ、僕一身の運命を打つつけに、君に知らせよう。君に聞いて貰はう。

又、失敗した。も一度斯う言つて置く。僕は實に殘念でたまらないのだ。僕は君、この手紙を書きながらも、男泣きに泣いて居るのだよ。

僕、君に別れてから三年になる。あの別れる時、僕は有ゆる手段を盡して、僕の一身を東京に止めて置き度いと思つて、出來得る限りの方法を講じて見た。が、あの時には僕の家庭の事情は、如何な事をしても僕の要求をいれるわけには行かなかつたのだつた。君にはその時にも話したが、父はもう老衰して居るし、兄は一家の

主柱となれず、弟は年が若い、と言ふ上に例の負債と言ふ奴がある。あの時には、僕が家に歸つて、夫を處理する外に、僕の一家の人々は悉く無能力者であつた。で、僕は

『甘んじて犧牲になる！』と君にも一言、言つたざりで東京を去つた。去かし、當時、僕はあれ程熱望し、中學を卒業した當時には家を逃げ出してまで、學問をしようと思つた、あの心を如何してさう、何でもなく捨てゝしまへよう、僕は自分の全力をあげて、この問題を處理し、近い中に又必ず上京する、と堅く心に期して居た。で、家に歸つて見た、すると、家の事情の複雜し、錯亂して居た事は、とても今、自分の筆で、その狀態を君に盡く書く事は出來ない程である。あゝ、何やかやと言つて居る中に、三年は經つてしまつた。

僕はもうたまらない。幾度となく心の中で、

『起て！』と強い聲で命令されるやうだ。僕は幾度も、その計畫を立てた。自分の生涯の運命の爲めに、僕はあくまで新しい自分の道が拓き度いと思ふ。今の處では他意は無い、僕は自分の前途の爲めには家をも捨て度い。で、言葉を盡して父に之を計つた。處が父はそれを聞くと、又、言葉を盡して、家の問題、家の存在の爲めに、僕がせねばならぬ事を說いた。僕は遂々父の前に我を折つてしまつた。

失敗、失敗！、僕は又失敗した。去かし僕は如何しても今の境界から遁れ度い。今のこの苦しい、僕の心にとつて極めて不自然な生活から遁れて生き度く思ふ。ただ、僕は父の言葉を思ふのだ。父は年をとつて居る。この老年の親をこの錯雜した家庭の中に捨てゝ、僕は何處に行けよう！ 僕は又折れてしまつたのだ。繰り返して書くが、僕は又折れて、この店頭に自分の頭の荒れて行くのを見て居るのだ。

僕は、ともかくもこの家の中で又幾年かの時を送らねばならない。この生活と言ふ事が極りなく僕には負擔だ。が、それは堪へるとしよう。それは何處までもこの心で押し通すとしよう。たゝ、僕は折ふし自分の心が自分に裏切りをして、叫び出

す事がある。僕一個の慾望だが、僕の心の滿足を得る爲めに、何とも知れぬ聲で、『起て！』と言はれる事がある。その聲に向つてこれから僕は幾何の努力を以て反抗せねばならぬのだらうか。僕はその時には酒でも飲むか、頭の中を自分でかき廻すやうな事をしなければ、とてもぢつとしては居られないよ。僕は二つの別々な力で攻め立てられるのだもの、君は僕の舊い友人だ。この心持を察してくれられるだらう。

僕は死んだもののやうな心になるつもりだ。それは君、察してくれたまへ、死んだもののやうな心にならなければ、今の僕の境界では、とても生きては行かれないんだ。僕等青年は、その希望から別れろと言はれたとしたら、兎に角くその生活の半分を削り去つたやうなものでは無いか。生きると言ふ事が、それは年をとると共にどんな風に思はれて來るか知らないが、僕等の時代に、その希望の目標となる可きものを奪つてしまつて、生きて居ろと言はれたとしたら、それは死骸になれと言はれたのと同樣だ。

僕は理窟を言ふのぢや無い。理窟が言へる位、頭がはつきりしては居ない。僕は興奮してしまつて居る。『失敗した！』と言つたのは、興奮した僕が叫んだのだ。まして、僕は今の僕の背景となつて居るものを君に充分に報告する事すら出來ない。僕は頭がぐぢや〳〵だ。

吉田君。僕は遙かに斯う君を呼びかける。すると君や、吾々の友人達が、東京の何處かの家の一室の中に集まつて、快活な、晴やかな話を交換して居る姿が、目に見えて來る。去かも、僕はその圍體の中から遙かに隔たつたこの田舍町の、古びて煤けた家の中で、ぽつねんと一人坐つて居る。一度は僕は諸君を冷笑した。そして自分を人生の奮鬪者と視なして自ら慰めて見もした。去かし、そんな事はやはり僕が一時自分を僞り、自ら心を欺いて居たと言ふに過ぎなかつた。年月はその僕の興奮せる心を十分冷し去つた。今、殘つて居るものは何だ？、別に何にも無い。僕は

自分の希望にはぐれて、日一日と時を消して來たと言ふ事に過ぎない。それだけだつた。あゝ、夫だけだつた。

で、さう氣が付くと、僕は（去年の秋からさう思ひ出したのだつた。）全力を擧げて上京の計畫をし出した。その計畫を成就させる爲めには、家の商買を弟に委せてもよいやうにと、その方の盡力もした。そしてもうよからうと思ふと、その時には、必ず一つ何事かが起る。で、遂々今日まで三度この計畫を立てた。それが敗れて、今度は四度目、それも又失敗した。

僕はもう此上は沈默する。沈默してたゝ自分の運命に盲從する。ほんとに、まだ僕は自暴自棄しては居ないが、此頃は何もかもいやになつた。君、僕は酒が飲みたくなつたよ。

僕は君の健康を祈る。その僕の心中には嫉妬の情もある。君が羨ましくつてたまらなくもある。去かし、又君が世界中で一番懷しい。僕は本當に君の健康を祈る。

月　日　某

露ちやんに

△東京の幼き從妹に、郊外の家庭より

暖かになりました。この節は大層御無沙汰を致しましたが、叔母様を始め、皆様にお變りはありませんか？、露ちやんもお丈夫？。私共では皆丈夫ですから、御安心下さいませ。

今、露ちやんは學校がお休みでせう？。毎日何をしてお出でなの。こつちにはちつとも來て下さらないわね。ね、露ちやん、此頃はね、こゝいらは摘草が丁度いゝのよ。私は此間から露ちやんがお出でになるだらうと思つて、心待ちに待つてましたわ。何時でもいゝから、お休みの中に是非一度お出でなさいな。來る時にはがきを出して下さいよ。私、御馳走をこさいとくから、そして原の方に行つて、摘草をしませう。

私、今年は露ちやんに、食べられる草をどつさり敎へて上げますわ。その上に野原は私なんか毎日見て居ても氣が晴々するのですからね。露ちやん見たいに、東京の中にばかり居る人には、それはいゝ心持でせうよ。

叔母さんによく言つて、お泊りがけでいらつしやい。家の兄さんも、露ちやんに是非いらつしやいつて言つて待つてらしつてよ。きつといらつしやいよ。

さよなら

月　日　　某　子

君の事を思ひ思ひ御無沙汰をしました

△別れた友人に、都の某より

君の事を始終思ひながら、つい忙しさに取りまぎれて居て、非常に御無沙汰をしました。

今日、もう東京の中は家を一足踏み出さうものなら、何處を見ても櫻の花盛りと言ふ頃になりました。丁度、春のこの頃になると、僕は一種の幻の中に包まれたやうになる。幻――心の奥に刻み付けられて居る、追懐の幻が、丁度花が一時に開いたやうに僕の心を包んで來ます。僕の心の中には、今迄經て來た生涯の記憶が一つ一つ生き返つて來るのです。

今日は、この二三日うツとしく曇つたり晴れたりして居たあげく、雲が一つ無いと言つたやうな晴々した天氣です。今度の僕の家は南側の庭に向つて椽が長くあるので、そこに日を浴びながら腰をかけて居ると、全く氣が伸び〳〵して來るのです。もう日向に出て居ると、日が暑く感じられる程になりました。僕は丁度來て居る弟と、二言三言話をし合つて居ると、蒸すやうな日の光で身體には少し疲れを覺えて來たが、心持は如何にも悠々となつて、もう近頃の僕の周圍を取り圍んで居る種々の勞苦や問題は、すつかりと忘れてしまひました。すると、張りつめた心持が段々と伸びて行くやうになつて、自然と樣々の事を思ひ出されて來ました。

君に別れてからも、もう隨分長くなりますね。如何も互に、自分々々で生きて行くと言ふ事だけで、忙殺されてしまつて居る時が多い。生活に追ひ立てられて居ると、我を忘れたやうになつて、その中だけで動いて居る日が多いのです。今日のやうな時は、ほつとなつて、吾に返つたとでも言ふのでせうか、心がその枷から放されると、始めて友人を思ひ、自分の心を振り返つて見るのです。僕は近頃、こんな

ですよ。

で、あまり久しく音信もしなかつたので、手紙を書かうとして見ると、さて何から書いたものかと、迷はれてなりません。僕の心の中には君に別れてから爲た事が、ずつと順序を追つて思ひ出される。ですが、それを一つ一つ、その思ひ出す順に從つて書いて行くとなると、それだけでも三日も四日も續けて書いても、終るまいと思はれる程です。その中には又、忙しいせねばならぬ仕事に追ひ立てられて、この心持が消えてしまふかもしれません。それよりは手つとり早く書いてしまひます。

子供達は大きくなりましたよ。もうてんでに自分達の心から、如何したいとか、何が慾しいとか、如何なものが良いとか言ふ事を言つて、僕等に要求するやうになりました。僕等夫婦も、何時と言ふ事なしに、子供達に向つて、親らしい心持が漲いて來て、何のかのと思ふやうになつて居ます。君が、まだ東京に居て、始終往き來して居た時分には、まだ僕達からして、子供に對して親と言ふ心持は極く薄い、影のやうなものであつたのでした。子供達がまた小さい意識の薄いものであつたので、僕達もそれに向つては、何處までも一人の人間として向ふと言ふ心持が薄かつたのですね。それが、もうたつたこの一二年の中に、自分達の手では自由にする事が出來ないものになつて來ました。子供達の存在の權威が次第に明かになつて來ました。

斯うやつて行く中には、更にこの心が明かになり、親子の間に、子の存在が明確になつて行く事でせう。

良子の方はもう、髪を分けてリボンを結び付けるやうになりました。着物の善惡、穿物の善惡で、折ふしは苦情を言ひます。その時に僕は如何も苦笑させられます。そしてその度にお清に向つて「これで今に如何なる事か？」と言ふのです。するとお清は「誰も同じですね。私もよくあんな事を言つて、阿母さんを困らしたわ」と言ひます。この言葉にも、僕は苦笑させられるのです。

こんな事を思つたり、言つたりしながら、僕はやはり自分の仕事をしつゝ、日を消して居るのです。仕事をして居さへすれば、それにまぎれて日の經つ事の早さ。つい一月たち、二月經ち、その中に年の暮れて行くのが驟く中のやうです。時が馳け足で經つてしまふ。

此間の夜に、僕はふつと古い日記を出して見ました。君と向ひ合ひの家に居た時分の日記です。あの時分には、僕はまだ、家庭と言ふものが珍らしくもあつたし、如何したらこの一生の宿をうまく組み立てて行かれるかと、底の方には恐れをも感じられて居た、その頃の日記ですから、今見ると、種々と心を働かして、自分の理想を組み立てて居たものです。從つてあの頃は、一寸夕方に君に來て貰つて、一緒に食卓に向ふと言ふやうな事までにも、非常に大きい抱負や、興味がありました。

抱負と言ふと、大げさで、おかしくも思はれるが、實際、そんな事まで一々、僕が當時の理想、計畫、(家庭の和樂、幸福に向つての)の一部分だつたのですからね。

で、獨りで心中に無限の未來を描いて見ては、嬉しがつて居たのです。僕は今、その當時の事を思つてるのです。實に幼い心持でした。去かし、僕はその自分の心持に向つて、決して反感が起るやうな事はありません。それを思ひ起すと愉快です。丁度、實に面白い夢を見て來た跡を振り返つて見て居るやうな心持がします。

君とは、丁度僕が一人の青年――まだ何もかも珍らしく思はれ、何に向つても見當の付き兼ねて居る時分にお別れしたのですね。その後、君もその戰爭のやうな仕事の中に入つて行かれ、僕も世間に生きて行く上に、種々の經驗をして、この別れて居る二三年の中に、互に無心に臭が泌みて來た事だらうと思ひますよ。今度お目にかゝる折には、二人とも少からず、心が隔つて居る事でせう。

こゝまで、種々と心に浮ぶ儘に書いて來ると、僕の心には何となく、親しい友達と思ひながら、その心と心とが別れて行くと言ふ心持がします。何處となしにうら悲しい心持がします。君、人生の道は矢のやうに飛んで行く、まだ知らぬ境へ、理

解も豫想も出來ない境へ、一度切つて放された矢が止まる事が出來ないやうに進んで行く。そして終りは何處でせう？、何でせう？。

手紙を書き出すと又大變長くなつてしまひました。僕は自分の周圍の報告を君に　し度いと思つたのだが、それはおるすになつてしまつて、妙に感情的な手紙が出來ました。

終で、失敬だが、君の御健康が、僕は始終心にかゝつて居ます。何卒大切にしてくれたまへ。そして近い中に、互に顔を見せ會ひ度いものです。　草々

月　日　　東京にて　某

旅よりのはがき

△東北旅行の途上より、妹へ宛てて——

一　今水戸を過ぐ

今、水戸を過ぐ。丁度十一時少し過ぎた。車の中では皆それ〴〵異樣な姿をして眠つて居る。僕は心が冴えて、眠れない。

何だか氣がかわつて、いゝ心持だ。お前にはがきでも送らうと思つて、こんな事を書いた。これは車のボーイに託けて、水戸の停車場のポストに入れさせる。

二月廿八月夜

二　窓の外はすつかり雪

今、午前五時。もう十五分すると仙臺に着く。

窓の外はすつかり雪が白く見える。寒さうな空には、曙の光が氷の中を透して來るやうだ。

仙臺には二晩位泊る積り。昨晩はあれからぐッすりと眠つた。

三月一日　未明

三　第一の印象——仙臺の町で

仙臺の町は、黑ずんで居る。町を行く女は、大方布呂敷のやうなものを冠つて居る。これが一番初めに目に付いた。

今日は松島に行つた。まだ寒いから、鹽釜の山の上から眺めた丈で歸つて來た。土の色は灰白色をして居る。それが頭に殘つて居る。

宿屋に泊つて居て、近所の名所歩きをして居るのは、何處か間がぬけたものだね。

三月二日

四　文庫をよく整理しといておくれ

今朝仙臺發。今度は短い滊車で、ゴトリ、ゴトリと行くんだ。今夜は花卷で降りて、あす遠野に向ふつもり。

留守の中に、あの僕の文庫をよく整理しといておくれ。

三月四日ひる仙臺にて

五　滊車の中は一人ぼつちだ

滊車の中は一人ぼつちだ。仕方が無いから辨當を食つて見たり、田舍の菓子を食つて見たり。こんなはがきを書いて見たり……

三月四日一ノ關の處で

旅よりのはがき

六　北上川の附近は

北上川の附近は廣い野だ。雪がそれに一帶に積つて居る。
停車場々々々に雪除が出來て居る。それが面白いが淋しい。
一ノ關から一人老人が乘つたが、黒澤尻と言ふ處で降りてしまつた。いくら動いて居るからつて、朝から晩まで、一人車の中で暮すとはあんまり寂しい。
仕方がないから、今夜着いたら、何か甘いものでも食はうなどと、いぢのきたない心持を起してる。（これは花卷で投函）

四日夜八時

七　ここから遠野まで十二里餘

今朝、この花卷を發つ。
途中は思ひ切つて道が惡いさうだ。こゝから遠野まで十二里余。ガタ馬車で一日その惡い道をゆられるのは思ひやられる。
今日は曇つた。途中雪にならねばいゝが。

五日午前九時

八　某と云ふ峠の上で

今、某と言ふ峠の上で馬車が止つた。
四邊は雪――半年の間とけないで居る雪が、落葉林の土を埋て居る。空疎、寂寞、人を殺すやうな沈默！

五日正午

九　相乘りの人達と晝餐を始める處

今、やつと宮守に着いた。午後三時。

はたして雪が降つて來た。馬車に相乘りの人達と、宿舍の二階に上つて晝餐を始める處。僕は馬車でもまれてるので、あまり食ひたくないから、卵を煮て食つた。ここで又、ポケットウ井スキーが役に立つた。あれを卵の中に入れて煮ると、中々うまい。一緒にめしを食つてる人達は、不思議さうに僕を見て居る。旅に出るとよくこの「何しに來た」と言つたやうな目に出くはすものだ。（宮守にて）

午後三時半

はがき十二通

林　行雄

△種々の人よりのはがき——

一　歩い歩いて……

これから出懸けて甲州の方へ行く。三十一日に歸る。

歩いて歩いて歩きぬいて見たい。

十二月廿九日ひる

二　獨立祭

明後日は僕の家の紀念祭だ。まづ獨立祭と言つたやうなもの……僕が阿父の家を出て自分の家を持つた日なのです。

明後廿八日はその日だから、君にも來て貰つて一緒に晩餐を食つて貰ひ度い。來てくれたまへ、きつと。

六月廿六日　町田清太郎

三　私の顔を覺えて居ますか

謹賀新年。

もう別れてから八年目のお正月ですよ。それでも私の顔をまだ覺えて居ますか。今年あたりは逢ひ度いものですね。

一月一日　猪谷國三

四　いつぞやは電車で

いつぞやは電車で、はからずお目にかゝりました。もう學校を出てお別れしましてから六年目になりますわね。あなたの、お變りになりません事。私、大變お婆さになりましたわ。

今度の級友會には是非いらつしやいましな。多分この卅一日の午前十時、學校で、するのですと、幹事は吉植さんです。

一月十三日　本村雪子

五　舊友より

僕のこのはがきを見たら、君は驚くだらう。

今日、演習地で植村に逢つたら、君の噂が出た。君は今、そこに居ると言ふ事を聞いた。此頃、中々盛んださうだね。當年の泣き虫——君は昔よく泣く子だつたせ——も今は一人前になつたな。

東京に歸つたら、遊びに行くぞ。君も酒位はのめるだらう。大にのまう。

五月七日　丸井豐三

六　あの室は

今日、雜司谷のお會式を見に行く。△屋の昔僕の居たあの室は、依然として昔の儘だつた。

螢とりに行つて休んだ茶屋の婆さんも、まだ丈夫だつた。

十月十八日　好三

七　祖母様が六ケ敷い

一寸申上ます、二三日前から又お祖母様は御病氣になりまして、醫師の申すには大分六ケ敷い相で御座います、それに就て父様も母様も、今日から下谷の方にお出になりました。家が無人で用心が惡いので、何うぞ二三日お歸りなすつてお留守居して下さる樣、母樣のお仰で御座います。だから至急御歸宅下さい。取急ぎ失禮致します。

五月三日　好子

八　韓國の農地より

渡韓！

昨三十日に、群山に着いた。又、これから土ほじりの仲間になつて半年はここに暮す。鄕里を去つて來ると、友人の音信程、たのしいものは無い。御近狀を度々くれたまへ。

御令閨へもよろしく。此度は單獨で滯在して居る。約二ケ月ばかりの豫定。

十月三十一日　清住耕一

九　餘興芝居の繪はがき

昨夜は、お見舞下さいまして、有難う御座いました。あれからはお腹も痛みませんでした。御安神下さいまし。

この畫は此間、或學校の餘興のお芝居のです。その中に、あなたに似た人が居るのですよ。それだから送ります。

今風が吹いて來さうです。お休みなさい。

十月廿六日　清子

十　姉より下宿に居る弟へ

用事ばかり申し上げます、當月九日にはお前さんのお誕生日だから、是非御歸宅被下るやう。

それにはおかへりの御都合もありませうから、お晝におかへりになるか、又夕方におかへりか、一寸はがきで返事を下さい。皆で待つて居ますよ。　かしこ

四月五日　澪子

十一　弟よりの返事

お晝から歸ります。

久しぶりで、家のめしを食ふと思ふと、嬉しいやうな氣がする。その日の主人公の僕は、家の外に居て、のこ〳〵歸つて行くと云ふのは、奇抜なお誕生祝ひだ。

姉さんどつさり御馳走して下さい。

六日朝　好三

十二　演習地から

はがき十二通

或る人々の往復した手紙

六日の日當地に着。

雨の多い事。道の惡い事。食物の少い事。水のよからぬ事。女の美しからざる事。これがこの地方の名物のよし。

只今は中隊本部にあり。櫻屋と言ふ大きからぬ旅館に泊つて居る。

吉田、窪川兩兄によろしく。

下總佐倉にて　山本　一

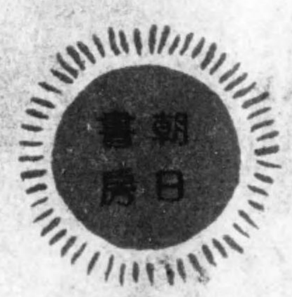
愛の書簡了

昭和十五年五月十五日　印刷
昭和十五年五月三十日　發行

愛の書簡　奥附
上製正價壹圓二十錢

著作者　近藤　佶
發行者　川崎久敏　東京市麹町區五番町十二
印刷者　田中舜二　東京市神田區西神田一ノ十一
印刷所　平賀印刷所　東京市神田區西神田一ノ十一
發行所　朝日書房　東京市麹町區五番町十二　電話九段一八六一番　振替東京三五二六九番

不許複製

407
7

終